

国語シリーズ 14

国語問題問答

文部省

目 次

1	当用漢字表について.....	1
2	当用漢字音訓表について.....	7
3	当用漢字字体表について.....	18
4	当用漢字別表（教育漢字）について.....	37
5	人名用漢字別表について.....	45
6	現代かなづかいについて.....	49
7	これからの敬語について.....	72
8	外国語・外来語の表記について.....	77
9	中国地名人名の書き方の表について.....	84
10	送りがなについて.....	86
11	左横書きについて.....	93
12	そ の 他.....	95

刊 行 の 趣 旨

国語シリーズは、国語の改善と国語教育の振興に関する施策を普及徹底するために編集するものであります。

このシリーズは、国語問題編・国語教育編・国語生活編および国語教養編として、それぞれ逐次刊行する予定であります。

問題編は、主として国語審議会の発表した事がらを、教育編は国語指導の方法などを、生活編は国民の言語生活に関する事がらを解説するものであり、教養編は、一般の国語教養を高めることを目的とするものであります。すでに、問題編および生活編ではそれぞれ4冊、教育編では5冊を刊行しています。

この本は、問題編の5冊目として国語課で編修したものであります。

国語課では、昭和22年以来これまで当用漢字・現代かなづかいなどについて、広く各方面から寄せられた質問に対して、そのつどお答えしてきましたが、それらに基いて事項別に編集いたしました。

昭和 28 年 2 月

文部省調査局国語課長 白 石 大 二

1 当用漢字表について

【問】 当用漢字表は、選定の基準はどういうところにありますか。

【答】 今回、発表した「当用漢字表」は、その名の示すように、さしあたって一般社会に必要な漢字を選んだものであって、各官庁や新聞社などから希望の漢字を求め、これについて慎重に審議を重ねて決定したものであります。その選定に当っては、客観的資料として従来の使用度数の調査をできるかぎり活用しましたが、一面実用を重んずる立場に立って、使用度数の上からは棄てたくても、実際にまだ必要だと認めたものは採用し、一方、今後無くてもすむという見通しのついたものは、見慣れた字でも思いきって省いてあります。この点、現実の必要に即しながら、一面、やや理想的な考え方を含んでいるわけです。以下、実例について説明します。

(1) 代名詞・副詞・接続詞・感動詞・助動詞・助詞は、なるべく

かな書きにする。

×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
僕	此	其	臈	稍	尙	或	噫	也	迄	乍…省く。

(2) 動植物の名まえもかな書きにする。

×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
杉	桐	栗	柿	猿	猫	熊	狐	鼠	鯉	鮒	鯛	鰯	鳩
×	×	×					□	□	□	□	□	□	□
鶴	鶯	鶯	など	すべて	省く。	牛	豚	馬	象	羊	鯨	鶏	

☐ ☐ ☐ ☐ ☐

松 桜 梅 竹 桑…などは、熟語構成の関係ではいって

	X	X	X	X	X	X
--	---	---	---	---	---	---

ます。これにならって、鍋 釜 鋤 鍬 膳 箸…などの器

III. Results

物の類も、かな書きにする方針です。

(3) 字形のむずかしいものは省く。鬱 籤 餐…は省く（例外、

☐ 絨
 ☐ 廳

(4) 使用範囲の狭いものは省く。 × 挨 × 拶 × 曖 × 昧 (例外, 矛 □)

□ □ □
盾 膨 脹)

(5) 訓だけのものもしくは、おもに訓だけを使うものは省く。

× 辻 × 躰 × 鉤 × 据 × 戾 × 揃…は省く。(例外, 繰 □ 込 □ 板 □)

(6) 同じ音で意味の近いものは、一方を省く。綜(総) 慾(欲)

× □ × □ × □ × □ × □
聯(連)迴(回)棉(綿)礦(鉅)洲(州)...

(7) 代用語の考えられるものは省く。興論→民論 ☒ 世論 ☐ 公論

×☐ 媾和 → 講和 ×☐ 編輯 → 編集

(8) おもに官片だけで使われるものは省く。俸 牒 傭 (例外)

叙 轉)

以上、だいたいの選定の目安をあげましたが、これとて実行の点を深く考えますと、嚴重に一線を引くことはなかなかむずかしいのでありまして、幾多の例外が出てくるのであります。

次に新憲法の漢字は、全部これを含めることにしましたので、

☐且 ☐又 ☐但 ☐虞 ☐准 ☐箇 ☐鍊 ☐奴 ☐隸 ☐拷 ☐遵などの字はいっ

ています。固有名詞は別に考えることになっているので見慣れ

た 岡 阪 函 伊 藤 彦などははいっていません。

その他、[×]闇 [×]味噌 [×]醤油 [×]詫 [×]糞…などはかな書きでけっこう
 かと思います。幽 ☐ 愁 ☐ 魅…などは文学上、釀 ☐ 酪 ☐ 銑 ☐ 慌 ☐ 窯 ☐
☐ 賠…は官庁・新聞に必要なのであります。なお、碁 ☐ 跳 ☐ 躍 ☐ 豚

の4字は採用してあります。

もともと、漢字の選定にあたっては、どれが必要でどれが不用か
 ということは個人個人の考えが違うのでありまして、なかなかひと
 すじなわではいかないのであります。今のところそれは社会の良識
 によって決めていくより方法がないのであって、その意味で各分野
 の代表のかたがたが集まって最善の努力をはらい、幾多の論議を戦
 わせて得られたこの表は、大いに意義のある仕事であると信じるの
 であります。国字の簡易化のため、各方面の協力と実施とをお願い
 します。

漢 語 の 整 理

【問】 漢字の制限だけをして、漢語のほうを制限しないのはいた
 いどうしたことでしょう。「所せん」「さ細」「じん大」「け
 ん疑」「軽べつ」の類を初めとして、「ひんしゅく」などの例
 をしばしば見受けますが、漢字制限は、ただ単に難解な文字を
 追放するだけでなく、もっと通俗・平易な表現をするようにし
 て、はじめて真の目的を達することができるのではないでしょ
 うか。

【答】 漢語を整理せず、かなと音読の字を重ねて表現しているのに疑問をいだかれるのは、もっともなことで、こちらでも漢語の整理を当用漢字表の範囲内でやれるよう準備しています。しかし、「挨拶」とか「贅沢」といったような、耳に聞いてわかるものはかなで書くことにしたい。

むずかしい漢語は、他に適当な書きかえ・言いかえの新語で書き改めるようにしたいものです。平易に言い表わせるものを、ことさらに漢字漢語を使ってむずかしく言わなくてもいいと思います。

「絃」と「弦」

【問】 このごろ、新聞などで「管げん楽」と書いているが、必要な字ゆえ「絃」の字を復活してはどうですか。

【答】 古い伝説に、和琴はもと弓の弦をかきならしたところから発明されたといいますが、中国でも琴の元祖は一弦琴だということですから、あるいはそういうことでもあったでしょうか。

漢字としても弦のほうがもとであって、糸ヘンの絃はあとからできたものらしい。すべてこういう形のもの「(いわゆる両頭相望ムモノ)」をゲンといったので、それを玄の字で表わし、それにまず弓ヘンをつけ、さらに後代にいたって糸ヘンや舟ヘンを付け加えた絃や舷の字が分化したものと考えられています。

楽記に「五弦之琴」、淮南子に「管^{えなんじ}弦」とありますが、各種の

字書には「弓ノ弦ハ糸ヲモツテツクル。弓＝張ル。コレニヨッテ，琴瑟＝張ルモノモマタ弦トイフ。俗＝絃＝作ルハ非ナリ（説文段注）。琴瑟ノ弦モマタ弦ノ字ヲ用フ。絃＝作ルハ非ナリ（五經文字）。オヨソ弓弩，琴瑟ノ弦ミナ弓＝従フ（博雅）。經典，弦，通ジテ絃＝作ル（康熙字典）。樂器ノ糸ヲモツテ声ヲ発スルモノ多ク弦ト称ス。管弦，弦索ノゴトシ。通ジテ絃＝作ル。弦歌，弦誦，弦柱（琴柱のこと）（辞源）」とあります。

ところで当用漢字表には絃の字を採用しなかったもので，近來ラジオの番組などに「管げん楽」と書いてありますが，これは「管弦楽」でもよいのであります。以前のように弦と絃との両字を併用していた時代には絃のほうを使うのが常識的で，むしろ当然ともいえましょ うが，すでに絃の字が当用の範囲から締め出された今日では右の字義と用例とによって，弦の字を使うことが認められてよいでしょう。文部省編修の音楽教科書にも管弦楽・弦楽器と使うこととなっています。

「三 か 条」

【問】 「三箇条」「三ヶ条」などは，これから，どう書くのがよいのですか。

【答】 「三か条」と書くのがよいのです。

「箇」の字も当用漢字表にありますが，これは当用漢字制定以前の憲法にあるので，いたし方なく，読むための字として当用

漢字表にはいっているのです。

「か」は、ひらがな文の中では、やはりひらがなで「か」と書きます。

「ケ」は、漢字の略字として「か」と読まれてきたのですが、それは使わないことになりました。

2 当用漢字音訓表について

【問】 当用漢字音訓表はどんな方針で決定されましたか。

【答】 これについては、安藤主査委員長の総会への報告を次に掲げます。

当用漢字音訓表に関する主査委員長報告

安 藤 正 次

本委員会が当用漢字の音訓の整理を使命として組織されてから、ここに約10月か、主査委員会を開きましたのは、昨年12月24日を第1回といたしまして、本年9月4日までに29回の間、委員会各位の終始変らぬ御熱意と御精励とによりまして、この複雑なしかも画期的とも申すべき仕事がようやくまとめられ、さらに慎重審議を重ねました末、ここにお手もとに差し出しましたような成案をうるにいたりしましたことは、まことに本懐に存ずる次第でございます。

さきに公布されました当用漢字が、わが国民の文字生活の簡易化・平明化を期して制定されたものであることは、今さらに申し上げるまでもないのでございますが、字数の制限だけでは、文字の簡易化・平明化の目的を達成することが困難であることも、一般に認められるとおりであります。漢字の国字としての複雑性は、主としてその運用の上に存しております。一つの漢字にいろいろの音があり、

またさまざまの訓があることは、漢字をどう使い分けるかを考える上からも、むずかしいことになってまいります。1字多用は便利なようではありますが、実際において不利であります。1語多字はことばの分化が伴わぬがゆえに不合理であります。漢字の国字としての使用を一般的のものとして、国民をしてらくに漢字を読ませ書かせるようにしようとするならば、今までのように漢字の音訓を野放しのままにしておいてはならないのであります。漢字の音訓の整理は、この意味において重要性をもつのでありますが、これはまたある程度において、従来の書記習慣をかえることにもなりますから、そこに少なからぬ困難が感じられます。しかしながらこれをおしきらなければ漢字の運用の合理化は望まれません。主査委員会が鋭意この整理案を作成いたしましたのも、もっぱらこの認識に基いてであります。

字の音訓の性質であります。これは中国におけるのと、わが国におけるのとでは多少の相異があります。まず字音について申せば、中国における漢字の字音なるものは、要するに、その漢字によって示されることばの音韻の一群であります。字音とは呼ばれているものの、これは、ことばの音韻成分であり、1語をなすものであります。このゆえに、中国にあっては、原則的にはすべての漢字には字音があることになっており、字音に古今の変、南北の差があるというのは、ことばの音に時処の相異による変化のあることを意味するのでありまして、漢字と字音とは有機的のつながりをもっておりま

す。しかるに、わが国における漢字の字音なるものは、もと本土の字音をそのままに受け入れたものではありませんが、その歴史的過程において、文字と字音との有機的のつながりがようやくうすらいでまいりまして、現実においてはだいたい、それは漢字の音用の場合に「ん」しての音に過ぎないという程度のものになっております。本邦の造字はもとより、中国伝来のものでも、その音用されないものが字音を欠いているのは、このゆえにほかならないのであります。

「梅」字のバイ、「花」字のカ、「観梅」「花月」「梅花」の上において、はじめて字音が現れてまいります。これらの文字は、単独では音用されないのであります。バイとカとが結びついてバイカという複合語ができたのではなく、「梅花」をバイカという字面に即してバイやカが字音として認められるのであります。「国連」の場合は「国際連合」のコクとレンを結びつけたものでありますが、これも同様に単独では音用されません。「信ずる」「感じる」のようなものも単用とはいえません。ここに単用というべきものは忠孝仁礼のような類であることによっても、字音の国語における地位をうかがうことができます。う。「請願」「起請」「普請」における「請」字が、セイ・ショウ・シンの三つの字音をもっているようなのも、やはり音用の場合に即して考えられるべきものなのであります。要するに、わが国における字音と漢字との関係は、文字そのものとは遊離の状態におかれてきたのではないかと思います。漢・呉・唐・宋の音が並び行われ、慣用音というものや、有職よみ・百姓よみ

などが行われてきたのも、こういう関係からでございましょう。字音の考察に当って、そのわが国における音用のいかに重きをおかなければならないのは、このゆえであります。

次に、わが国で字訓といわれているものも、中国で字訓といっているものとは、少しく違っているようであります。漢字は多義であります。それでその多くの字義のうちから、文章に即して、ここではこの字はこの意味であると解する。その場合に應じて与えられた意味が字訓であるとの解釈がありますが、わが国で普通に字訓といっておりますのは、漢字に結びつけられたものであります。この場合の字訓の成立は、国語のことばとの結びつきの程度のいかによって左右されます。わが国でよく使われている漢字で字訓を欠いているもののあるのは、このためであります。字義と字訓とを分けて考えること、字訓の今昔・死活を識別することは、字訓の整理に欠くことのできない用意であります。

次に、われわれの考えなければならないのは、音訓の整理は何を目標とするかであります。さしあたってわれわれが解決しなければならないのは、わが国民の文字生活を平明にし簡易ならしめるための、音訓の整理であります。したがってこの場合において、われわれが忘れてはならないのは、われわれは、わが国における漢字の音訓を対象としているのであり、わが国における漢字の運用を問題としていることでもあります。事が中国伝来の漢字に関するので、ややもすればわれわれの所見が、その本国における研究の成果や慣用

の歴史などにひかれて、国字としての性格を無視するような判断を下すおそれがないとは申せません。これもまた音訓の整理に際して、注意を要する重要な点となります。

今までにもいろいろの説が出ております。まず漢字は音用のものだけを認めるという、きわめてあっさりした意見もあります。しかし、これは実行に縁が遠く、社会は容易に耳を傾けまいと思われまゝす。次に漢字の音訓は1音1訓ぐらゐに制限したらどうかとの説もあります。しかし、これもあまりに公式的のもののように思われまゝす。実際についてみますと、漢字のうちには1音1訓ぐらゐですゐものが相当にありますゐが、それらはだゐたい整理を要しないもので、整理を要するやうなものは、そう簡単にはかたづきまゝせん。委員会におきましては、以上のいろいろの点を念頭におきまして、第1に一つ一つの漢字の音訓の性質を明らかに認識すること、第2に音訓のそれぞれについて一般的のものと特殊のものとに見分けること、第3に一般的のもののうちから、基準的のものを選ゐび出すこと、第4に音訓の指示に適正を期することを、整理の心構えといたしたのゐであります。

右のやうな立場から申せば、字音については、それが漢音か、呉音か、どこの音であるかどうかはたいした問題ではないのであります。字訓についても、それが昔からのものか、昨今の新しい訓であるかも、しゐて問うには及ゐびまゝせん。考察の重点は、それが現代の国語のうちにどゐう地位を占めてゐるかにおかれますので、その

音なり訓なりが、現代において生きており広く行われているということが採択の条件となります。しかし、単にそれが広く行われているというだけでは採否は決められません。文字の運用の上から、ことばの表記の上から、それを存しておくことが望ましいかどうかの見とおしを付け加えなければなりません。

本委員会は、だいたい右のような考え方、右のような立場から、当用漢字1850字の音訓の整理を試みたのでありますが、その結果について申し上げますと、まず大きく分けますと、訓専用のもの(30)、音専用のもの(844)、1音1訓のもの(787)、その他の音・訓両様のもの(189)の三つに分れます。

(1) 訓専用のものは、字音を認めるに及ばないものであります。全体の漢字について申せば、訓専用のものははるかに多いのでありますが、この種のものの多くは、当用漢字選定の当時においてすでに不採用となっております。

和字といわれる「峠」「込」はもとよりです。「卸」「届」「扱」も、今までももっぱら訓用のもの、「咲」「刈」「繰」「蚊」「芋」「芝」「畑」「沖」「滝」「瀬」「矢」「姫」「娘」「津」このうちにはたまたま「急瀬」「矢石」「美姫」「娘子軍」「要津」などのように音用の例もあるが、現代には縁の遠いものであります。

「且」「又」「但」「虞」も字音を問題とするに及びますまい。訓の整理については後の条に一まとめにして申し上げます。

(2) 音専用のもの

訓用の認められないもので、これにはいろいろの場合がありますが、要約すれば二つになります。

その一は、元来その漢字が訓をもっていない。すなわちその漢字の字義に相当する国語が字訓として与えられていない場合があります。「俳」「曜」「棒」「款」「氣」「稿」「糖」「胴」「般」「賃」「隊」「題」「魔」

その二は、その訓として与えられていることばが、あるいは古すぎたり、あるいは解釈的であったりしているために、社会的に広く認められない場合があります。

「京」^{みやこ}_{みさと}「債」^{おいは}_{はたる}「壑」^{はり}「官」^{つかさ}「児」^{こども}「判」^{わかる}_{わける}
音専用のものの字音の整理については、次に一まとめにして述べることにいたしました。

(3) 音・訓両様のもの

それについて、まず字音の整理については、次のようなことが考えられました。

(1) 漢・呉・唐などの音の区別にかかわらないこと。

行 ^{コウ}_{キョウ} 匹 (ヒキ) ^フ_フ

(2) 普通音と特殊音のある場合に、ことばとの関係に即して孤立的に現れるものと考え分けること。

久 ^{キウ}_ク 今 ^{コン}_{キン} 修 ^{シュウ}_{シュ} 仮 ^カ_ケ 内 ^{ナイ}_{ダイ}
命 ^{メイ}_{ミョウ} 納 ^{ノウ}_{トウ} ナ

次に字訓の処理については、次のようなことが考えられました。

(1) 古訓の整理

古い時代に与えられた訓が，なお今日につきまといっているのを整理すること。

「朝」あした 「類」たぐい 「戦」おののく 「奏」かなでる 「交」こもごも

「則」のつとる 「徒」いたすらに

(2) 解釈訓の整理

「詐」うそ 「欺」だます 「効」ききめ 「報」しらせ 「危」あぶい

「喫」のむ

(3) 同訓の整理

異字・同訓のものの整理は最も重要な問題であります。

「見」みる 「聞」きく 計，測，量はかる

(図，料，謀)

初はじめ 始(初，創)はじめる

傷(創)きず 努，勤つとめる (力，努，勉)

(4) かな書きの法則による訓の整理

副詞訓「凡」およそ 「剩」あまつさえ 「則」「即」すなわち 「将」はた

「頗」すこぶる 「徒」いたすらに

助動詞の「如」ごとし 「可」べし

(5) あて字訓

今日きょう 昨日きのう 煙草たばこ

(6) 特殊訓のあるものを認めること。

「日」^カ 「重」^エ 「路」^レ

「情緒」の読み方

【問】「緒につく」「端緒」などの「緒」を「ちょ」と読んではいけないか。

【答】「緒」は、正音としては「しょ」ですが、久しく世間で「ちょ」とも読まれてきましたから、それが慣用音として字典にのせてあります。すなわち

緒 ショ (漢音, 呉音) ^{ユイ}由緒, ^{シヨ}緒言, ^{シヨ}端緒, ^{シヨ}情緒

^{チヨ}緒言, ^{チヨ}端緒, ^{チヨ}情緒
 (慣用音)

ところが、当用漢字音訓表によって「緒」は「しょ」の1音だけになりましたから、当然「しょ」と読むのがよいのです。

【問】「情緒」は、明治以来、心理学用語として「情緒^{チヨ}」と読んできましたが、当用漢字音訓表によると、「緒」の慣用音が認められていません。これは「情緒^{シヨ}」と読むように改めるべきですか。

【答】漸進的に改めていくように、お互に心がけていきたいものです。「情緒^{シヨ}」では気分が出ないということも、けっきょくは「慣れ」の問題だと思います。

「ほ か」

【問】 「〇〇社ほか何社」という場合、「ほか」を漢字で書けば、「他」でしょうか、「外」でしょうか。

【答】 当用漢字音訓表によれば、「他」は「タ」としか読まないことになっています。そして「外」は「ほか」とも読むことになっていますから、当然「外」です。もっとも、こういう場合には、「ほか」とかなで書くほうがまちがいがなくてよいでしょう。

「来る」の使い方

【問】 当用漢字音訓表には、「来」は〔ライ〕とだけありますが、教科書には「来た」や「来ない」にも使っています。それでよいのですか。

【答】 音訓表には、動詞は代表的に終止形で示してありますから、その活用形は全部使ってよいのです。それで、

くる 来^こない 来^きた

などみな使えるわけです。

もっとも、こうした使い方は、必ずしもやさしくないのです。なるべく

くる こない きた

というふうに、かなで書くのがよいと思います。

ことに「来^こない」を「来^きない」という地方もありますから、
いっそう、かな書きがよいわけです。

「で き る」

【問】 可能の意味の「できる」を「出来る」と書くことができますか。

【答】 一応できますが、今日の標準語としては、もとの「出で来た
る」という意味はなくなって、単に可能の意味を表わす補助動
詞になっているのですから、原則として漢字をあてず、かなで
書くことになっています。

3 当用漢字字体表について

【問】 当用漢字字体表はどんな方針で選定されましたか。

【答】 これについては、安藤主査委員長の総会への報告が委細を尽していますから、以下に掲げます。

当用漢字字体表に関する主査委員長報告

安 藤 正 次

国語審議会第13回総会の決議に基いて、本主査委員会に付託にありなりました漢字の字体の整理に関しまして、委員会の審議の経過を御報告申し上げ、あわせて、その審議の末にできました当用漢字字体表について御説明申し上げます。

国民一般の文字生活において、主要な地位を占めている漢字の字体が、どう書けばよいかがよく問題になるくらいまちまちであったり、日々国民の目に触れる機会の多い活字にも、同字異体のものが並び行われているという現状は、いつまでもこれをなりゆきにまかせておくことはできないのであります。

漢字にはまた、字画のきわめてこみいったものがあったり、字体のお互に、ひどく似ているものがあったりして、その識別の困難なものがあります。混線や脱線の生じるのも無理がありません。書くのに煩わしさが多いばかりでなく、読む上にも見分けのむずかしいものがあります。これらの手近な例をあげてみましても、異体の統

合、簡易字体の採用、通用字体とか俗用字体とかいわれるものの確認といったような、それぞれの場合に応ずるなんらかの方法によって、字体の標準を定めることが必要に感じられてまいります。したがって漢字の字体整理ということは、はやくから主要な要件となっておりまして、すでに、1 大正8年7月には文部省普通学務局から「尋常小学校の各種教科書に使用せる2600余字」について『漢字整理案』が発表され、2 大正12年5月には臨時国語調査会から『常用漢字表』が発表され、これには154字の簡易字体が採用されております。3 大正14年11月には臨時国語調査会から『常用漢字表』について1020字の『字体整理案』が発表され、4 昭和12年12月にも国語審議会から『常用漢字表』（昭和6年5月臨時国語調査会発表）の1858字について『漢字字体整理案』が発表されております。最近にも、これが当用漢字選定の当時から問題となったのでありますが、その際には131字の簡易字体の採用を決定しただけで、その他のものについては、別に考慮することになったのであります。こういう次第でありますから、国語審議会では、当用漢字別表・当用漢字音訓表にひきつづいて、字体の整理を取り上げるのが当然の順序でもあります。しかるに御承知のように、これよりさき、文部省には活字の字体の統一をはかることを目標とした活字の字体の整理に関する協議会が組織され、そのみちの權威を集めての審議が進められ、活字の字体に関する限りにおいては、すでにその協議会で一応の成案をうるに至っております。このゆえに、さしあたってその

活字の字体に関する整理案を基礎としてこれについて検討を加え、さらに広く当用漢字全体についての整理に手をつけましたが、それについては、まずその協議会案についての世論を聞く要を認めましたので、国語審議会と協議会との名をつらねて約900通の調査書を各方面に発送して、その意見を徴しました。これに対する回答は175に過ぎませんでした。その意見には参考とすべきものが多かったのであります。これはその一例であります。この以外にもなお従来の字体整理に関するいっさいの資料を参考とし、また教科書関係、学校関係の人々の協力を求めて、審議を進めたのであります。

主査委員会では、昨冬以来委員会をひらくこと16回 慎重審議を重ねて、ようやくここに成案をうるに至りました。お手もとにさし出しました当用漢字字体表というものがすなわちそれであります。

当用漢字字体表は、まえがきの第1に、「当用漢字表の漢字について字体の標準を示したものである。」とあります。字体の標準というものは何を意味するかが、まず明らかにされなければなりません。字体の標準とは何を意味しているか。まず「字体」については、活字字体の整理に関する協議会では、これに「1点1画の組合せからなる1字1字の形である。」という定義を与えて、これを書体と区別しておりますが、これはだいたいにおいて受け入れてよい考え方であると思われますが、あるいはまた 点画の組合せの定型化されたものともいえましょう。歴史的に漢字の変遷・発達をたどってみると、なお別箇の見解も出てまいりますが 漢字を現段階のものにつ

いて考えるときには、字体を点画の組合せに即したものとみることが合理的であります。漢字のなりたちを論ずるには、少なくとも小篆^テまでさかのぼらなければという説も、一応もつともであります。通常現代のわれわれが漢字の字体についてもつ意識は楷書^{かい}体に即してであります。それは、点画の配置 組立を明確に指摘することができるのは楷書に限られるといってもよいからであります。草書・行書は動的であります。形態は動いてやまない態勢を示しておりますが、楷書は静的であり、定着的であります。草書が篆書からでき、行書が楷と草とのあいだから生れたというのが事実であるにしても、普通に行書は楷書から、草書は行書からというように解されておりますのも、楷書が主として漢字の書体を代表しているからであります。そこで漢字の字体の標準を示すということは、楷書体によって代表される、もしくは、それによって例示される漢字の字体についていうことになります。

そうしますと、問題はもう一度展開してまいります。楷書について字体を説くと申しても、印刷体にしても、活字体を例にとれば、活字そのものの特性に依存する独自の約束がありまして、これをもって筆写体を律するわけにはいきません。筆写体には、また筆写体の特異性に基く自由があります。このゆえに厳密に字体を論じますと、どの文字にも定まった型というものがなく、統一のないのがむしろその偽らざる姿であるともいわれそうであります。しかしまた、その変化の種々相を通じて共通的の実体の認められるものがありま

す。それらを取り上げてみますと、某字の字体はこれこれであるとか、某字の字体はまちまちで、いくつになるとか申すことが可能になってまいります。こういうように考えますと、漢字の字体の標準を示すことは、長い歴史を背景として、現に絶えず展開しつつあるそれぞれの漢字の型式のうちから、その典型的のもの、代表的のものを選ぶことに落ち着くのであります。ところが、漢字の字体をしさいに点検して、字体の分化や異体の発生のとをたずねてゆきますと、そこにいろいろの経路のあることが見いだされますが、簡単に申しますと、運筆の簡易化、点画の省略、類推による統合、別体の採用などがその主因と認められます。これは 字体の標準を決めるに考え合わせられるべきことであります。

ここで次の題目に移りますが、まえがきの第2項には、「この表の字体は、漢字の読み書きを平易にし正確にすることを目安として選定したものである。」とあります。本表の字体の選定は、何を目安として行われたかは、一つの重要な問題であります。同じく字体を整理するにも、整理の心ぐみが違えば手段も結果も違ってまいります。復古を目標においての字体の選定では、もっぱら字源主義をとることになりましようし、単に統一しさえすればよいというのならば、一も二もなく、康熙字典か何かに準拠を求めるというのも一案でありましよう。しかし本主査委員会におきましては、わが国における、国字としての漢字の使用の歴史と現状とに照して、字体選定の目安を上記の点においたのであります。漢字の字体の整理にあ

たっては、字体の考察もむろんないがしろにすることはできません。漢字の本国における学者の字体の考説も顧みられなければなりません。彼我両国の文字生活の関連における異体の発生や、両国人の文字観念の相違 その他いろいろの点において留意すべきものは多々ありますが、わたくしどもは、わが国の国情から見まして、同じく字体の整理をはかるにいたしましても、その国字としての立場に重きをおき、わが国民の読み書きを平易にし正確にすることを目安とすることにしたのであります。漢字を国字としていながら、その当用の範囲内にある漢字すらもよく書けないというのは、いかにも情ない次第であります。高い程度の教育を受けた人々のうちにも、うそ字を書いて平気でいる人が少なくありません。そういう人たちは、すでに、漢字をまちがいなく書こうという意欲を失ってしまっているのですが、まだそういう境地に落ちこんでしまわない人たちは、どうしたならばまちがいなく書けるかに苦心しているのであります。文字地獄にあがいているといってもよいのであります。それらの人々を救うためにも、字体の整理は要求されるのであります。が、それにはまず、字体を単一にする、すなわち、異体を統一することが第一であります。その場合には、1 二つ以上の字体の並び行われているものについては、点画の組合せのむずかしいもの、こみいったもの、書きにくいものはとらない、2 点画の組合せの複雑なもので省略の可能なものは、これを簡易化する、3 点画の組合せの微妙な差異はなるべく問題にしない、4 簡易字体の歴史的

因縁の浅いものでも、社会的慣用が相当有力であると認められるものは、なるべくこれを採用するなどの方法によって字体を決めることにいたしました。この方針による字体の選定は、また同時に、われわれが漢字を正確に書くという結果をも伴うことになります。むずかしいからよく書けない、よく書けないからうそ字を書く、また字をまちがえるということになるのであります。なお2～3の実例をあげてみます。漢字の型式にはいろいろの要素がありますが、者にあつては点が本来重要な要素であります。煮・暑・署・著・都・緒・諸などみなこの点をもつことになっております。しかし、こういう同類の他字との識別の要素でもない微細な部分のことは、見すごされがちです。したがって、この点の有無は、型式のなりたちの上に重きをなさなくなっております。これを見分け、書き分けさせる要はありますまい。寛・殺・逸の点なども同様であります。月部・肉部・青部の月月円を一つにする、「己」と「巳」と「巳」を一つにして「己」とする。全と今との上の部分を一つにするなど、恵を恵、専を専、微を微、徴を徴、徳を徳と書き、祈を神、祈を祈、巨・拒・距を巨・拒・距と書くなどもそうであります。

次に、まえがきの第3項には、「この表の字体の選定については、異体の統合、略体の採用、点画の整理などをはかるとともに、筆写の習慣、学習の難易をも考慮した。なお、印刷字体と筆写字体とをできるだけ一致させることをたてまえとした。」とあります。字体の整理という問題は 単に漢字そのものにおける点画の組合せに即し

てばかり考えられるべきではありません。国字として長く漢字を使用してきた国民の、過去および現在にわたる筆写の習慣について考慮することもたいせつであります。漢字使用の歴史を見てまいりますと、それぞれの時代には、その時代の社会に通有な字体観念ともいべきものが見いだされますが、それはとりもなおさず、その時代の人々の筆写の習慣を背景としたものであります。

「半」を「𠂔」,「次」を「𠂔」,「要」を「𠂔」,「即」を「𠂔」と書くようなのも、筆写の習慣の推移によるものと見られます。

簡易字体と見られるもののうちにも、この種のものが少なくありません。現在世に行われている「𠂔」（歴）,「𠂔」（闘）,「𠂔」（言）,「𠂔」（縣）,「𠂔」（廳）などは、その類であります。

わが国最古の在銘鏡にも銅が同、鏡が竟と書かれております。また古くヨヨ縁覚、メメ声聞の例もあり、醜醜を酉酉としたような例もめずらしくありません。筆写の簡便をはかることも、一つの流れをなしております。

しかし、こういう筆写の習慣をどこまで取り入れるかについては、相当に論議を重ねたのであります。一方では、これを筆写の自由性を認める程度にとどめておいた場合もあるのでありますが、また一方では、相当に大きく筆写の習慣による簡易化を取り入れた場合もあるのであります。

次に 学習の難易ということも、字体の選定についての有力な条件となります。漢字の本質から見ても、その学習において、字体の

誤りない認識をもつことがたいせつであることは申すまでもありません。字体の見分けやすく、書きやすいことが認識を確かならしめる第1の条件です。それには鮮明度が強く、運筆の粉らわしくないことがまず要求されます。「懷」(懷),「藝」(芸),「櫻」(桜),「疊」(疊)などはやっかいな字です。「巳」「已」「己」「乚」を見分け書き分けるのもむずかしいことです。一般に字画の複雑なものは誤りやすいともいえます。そういう角度からの検討も加えなければなりませんでした。しかもさらにまた、重要な案件の一つとして残っておりますのは、印刷字体と筆写字体とをできるだけ一致させるということであります。初めに申し上げたとおり、今回の漢字の字体の整理は、最初、活字の字体の整理として取り上げられたのでありますが、活字の字体となりますと、活字にはまた活字そのものの性格に基く制約と活字の発達歴史から派生した技術的の約束がありまして、活字において妥当と認められる字体を、必ずしもそのまま筆写体に応用するわけにはいかないのであります。今までの活字の字体は、主として活字本位でありましたために、筆写体との隔たりが多く、それが社会的にも教育上にも、大きな悩みのたねともなっていたのであります。ここに活字字体の整理という問題も起ってきたわけではありますが、今、さらにこの問題をおしひろめて、印刷体にも筆写体にも適用する一般的の字体の整理としてこれを取り上げることになってみますと、両者の調整がじゅうぶんに考えられなければなりません。これは当然のことであります。

本案において活字の特質に基くもの、筆写の特質に基くもの、それらの融通性を認めて、字体の素型に標準性を与えることにいたしましたのも、そのためであります。（「使用上の注意事項」参照）

以上、当用漢字字体表の説明を終えるに当りまして、一言なお申し添えたいことがございます。漢字の字体の整理は、前にも述べましたように、前々からの懸案であります。しかもその整理案の発表は、数次にわたっておりながらも、今日まで未解決のままになっているのであります。すでに当用漢字が制定され、その音訓表が発表され、それらがすでに実行に移されている今日において、同一圏内に属する字体の整理だけが残されるべきではないと存ぜられます。本案が総会においてさいわいに可決決定をみるに至りましたならば、当局においてその実施について最善の措置をとられるよう切望する次第であります。

漢字字体の整理統一が、必ずしも容易でないことは、わたしどもにおいてもじゅうぶんに了知しているところであります。これは一般社会のためにも教育界や印刷界の協力にまたなければならないのであります。活字の母型の製作、活字の新鑄などに多額の経費を要することも考慮しなければなりません。したがって、あるいは現下のわが国において、漢字の字体の統一をはかるということは、経済界の実情を無視したものであるとの非難も起るかと思われまゝす。しかし、その非難は、妥当であるとは思われません。一挙に各新聞社・各印刷会社・印刷工場の活字を新たにするというのならば、一時に

ばく大な金額を要することにもなりましようが、かくのごときことは、もともと漸を追うての実現を期すべきでありますから、経済的問題は何とか緩和されることと存じます。しかもまた他の一方において、戦後のわが印刷業界では戦災による活字母型や活字の喪失を補充するため、また業界の拡張に資するための、新規製作の要求の続出が見込まれるということも考えられます。もしこれが事実であるならば、今日の時期は、むしろ漢字の字体の整理をはかる好時期であるともいえましよう。いたずらに手をこまぬいては時期はまいません。わたくしは一般国民の協力によってこの難関を突破されることをせつに望んでおります。世にはまた、字体の整理のごとき国民すべてに関する問題は、ある一部のものの私議にまかせるべきではない、また官権の力をもってこれを民衆にしいるべきではないというような意見も出ているのであります。当用漢字の選定その他の問題についても同様の意見が出ております。しかし、思うにこれらの問題はすでに多年の懸案に属しており、民衆の間に論議がくり返され、しかもその解決の要求はもともと民間から起ってきているのであります。しかるに最近上記の問題に関する解決案が、主として国語審議会の審議にかかるものであり、まず官庁によって採用され実行されるので、ややもすればこれが天下りのものであるかのように誤解されております。昔は、民衆が国語・国字の問題の解決に熱心なのに、官庁側は少しもこれに共鳴しないというので、官庁側の冷淡が攻撃されていたのでありますが、今はこれとは逆に、官

庁側は解決案の実践に率先するがゆえをもって非難を受けるはめに陥っているのであります。これはまことに意外のことといわなければなりません。国語審議会の諸公は、至公至平、国民のため民衆のためを念として、国語・国字の問題の審議に当っておいでであります。文部省を始め官庁側では、心を一にして一般民衆のため率先問題の解決に協力し、さらに国民一般の協力を念願していられるのであります。イニシアティブが何人によってとられようとも、どの側からさきに実践者が出ようとも、その先後は論ずるに及ばないと思います。国語問題・言語問題の解決が、官府の強制によってなさるべきでないということは、わたくしの多年力説しているところであります。そのわたくしなどから見ましても、これを官府の強要と考えるのは事実の真を得たものとは思われません。本案につきましても、またこれがさいわいに本総会で可決され、採択された場合に、やはり同様な非難が起るでありますが、当局において、よく事の真相を明らかにされ、世の誤解を解いて、一般社会の協力をうるようお取り計らい願いたいと存じます。

シンニュウの書き方

【問】 シンニュウは「𠄎」と書いてもよいのですか。

【答】 シンニュウは、もと「^{ゆく}イ」と「止」との合字で、それを「𠄎」と書き、それから「𠄎」、さらに略して「𠄎」という形になったのです。従来、教科書体や習字の手本では、そのうちの「𠄎」をとっていましたが、一般の明朝活字では「𠄎」としていまし

たので、テンが一つか二つかということがよく児童の質問になっていました。そこで今度の字体整理では、明朝活字体のほうから筆写体のほうへ歩みよって、テンを一つにするということになったのです。つまり論点は、テンは一つか二つかというところにあったので、下をゆるかゆらないかということは従来どおりでよいということでした。そこで明朝活字では、旧来どおり、ただテンを一つにただけで「ㄥ」とし、筆写体では従来どおり何も変えないで「ㄥ」としているわけです。

字体表の「使用上の注意事項」に、

1) この表の字体は、活字字体の、もとになる形であるから、これを、みんちょう体・ゴシック体、その他に適用するものとする。

2) この表の字体は、これを筆写（楷書）の標準とする際には、点画の長短・方向・曲直・つけるかはなすか、とめるかはね またははらうかなどについて、必ずしも拘束しないものがある。

として、各種の例があげてありますが、その主旨によるのです。

「者」の テ ン

【問】 「者」の字は、以前は「𠂔」と「𠂔」と、どちらが正しかったか。また現在では、どちらが正しいことになっていますか。

【答】「者」の字は、旧字体ではテンがあるのが正しいのです。それで、活字（明朝）体ではテンがありました。学校でもテンがあるのを正しいとして教えてきましたが、

1 書道のほうでは、古くから中国でもテンを略して書きました。日本でも古写経を初め、一般の人もテンを略して書いていました。

2 現在では、昭和24年4月28日に発表の「当用漢字字体表」によって、正式に「者」の形が認められています。したがって教科書ではみな「者」になっています。

「都・諸・緒・煮・著・暑・署」などの「者」もみなそうです。

「教・舎・黄・帰・芸・内・蔵・旅」の字体について

【問】 次の諸字は第1欄の形が正しいと考えます。しかるに文部省編「総合当用漢字表」には第2欄の字体が載っています。印刷の誤りか。もしそうでないとすれば理由に対してお答えください。

第1欄	『理 由』	第2欄
キョウ	教 「教」はうそ字である。	教
シャ	舎 「(舎)」は舌部画である。	舎
き	黄 「黄」が正字である。	黄

キ	歸	「ヨ」が正しいと考える。	歸
ゲイ	藝	「芸」は音「ウン」で、藝とは全く別字である。	芸
うち	内	「内」は入部2画である。	内
くら	藏	「藏」のみが正しいと考える。	藏
たび	旅	「旅」が正しいと考える。	旅
			以上

【答】 1) 御来示のとおり、元来は

教 舎 黄 藝 内 藏

が正しいのですが、新字体として、昭和24年4月28日官報掲載の「当用漢字字体表」で、

教 舎 黄 芸 内 藏

をこれからの正しい字として認められたのです。

2) 「歸」の「ヨ」は、字原的には「ヨ」のようにウデが横につきぬけるのが正しいのですが、筆写体では昔から多く「ヨ」に書いています。新字体では、なるべく筆写のほうへ近づける方針で「ヨ」に決まったのです。

3) 「旅」のツクリは、字原的にもはねないでよいのです(元来「人」の字ですから)。それをこれまではねていたのは、筆勢によるつづきであったのです。しかし、今度の新字体で、はねないことにしたのは、字原によったのではなく、活字面を明るくするためでした。ただし、筆写体で自然の筆勢によるつづき

(連綿)ができて、それを誤りとするのは行きすぎです。

「桧」などもよいか

【問】 新字体に準じて、固有名詞などに使われる「檜」「蓮」なども「桧」「蓮」としてよいでしょうか。

【答】 特にさしつかえないかぎり、それでよいと思います。ただし、それを活字に及ぼして急に改めるようなことは、じゅうぶんに注意すべきことであると思います。

固有名詞と新字体

【問】 固有名詞でも新字体で書きますか。たとえば「広島」など。

【答】 「広島」「横浜」などのような例は、公文書でも、特にさしつかえないかぎり、なるべく新字体によることになっています。

「養」

【問】 「養」の字のシタは「食」ですか「食」ですか。

【答】 「養」です。すなわち「羊」(ヒツジガシラ)のシタに「食」(ショク)の字です。

「確」

【問】 「確」は15画ですが、筆写体でツクリを「ウカシムリに佳」

と書くと16画になります。どちらが正しいでしょうか。

【答】 15画の「確」を基準として教えてください。

ただし、そのツクリを「ウカンムリに佳」と書くのも、俗字として古来行われています。

「薄」

【問】 「厚はく」の「はく」、「うすい」の「うす」は点がありますか。「薄」「薄」の点の有無で、どちらが新しい字体ですか。

【答】 テンがあります。旧字体でも新字体でもテンがあります。

〔付記〕「薄」は「薄」一字で「うすい」という字です。

「様」か「様」か

【問】 「様」のツクリのタテボウは上から下へ一本に書きますか。

【答】 そうです。一本に書きます。

「棄」と「肅」

【問】 「棄」と「棄」,「肅」と「肅」,まんなかを,つけるか,はなすか。どちらが正しいのですか。

【答】 「棄」のシタは,字原的には「木」でなく,チリトリの柄を両手に,持っている形ですから,つけるのが正しいのです。字典には便宜に「木」の8画に入れてありますが,筆写体では昔から中国でも日本でもはなして,「𣏟,木」に書いているの

で、これからもそう書いてよいわけです。小さい活字では「市」でも「𠂔」と「巾」とが、また「夢」でも「𠂔」と「𠂔」とがつづいているように見えますが、これらもやはり、はなして書くのと同じ例です。

「肅」はつづけて上から一本のボウにかきます。

「静」

【問】 「静」の字が、新字体で「静」となったことに、はっきりと決まったのはいつですか。

【答】 国語審議会の「当用漢字字体表」が決まったのは昭和23年6月1日ですが、それを政府が正式に採択して、官報で発表したのは昭和24年4月28日です。

「船」のヘン

【問】 官報掲載の字体表で、「艦・艇・舶」のヘンは「舟」ですが、「船」の1字に限ってヘンの「舟」のテンが下につづいています。なぜですか。

【答】 官報その他で印刷上不鮮明な点があっても、すべて「舟」に統一されているのです。

略字について

【問】 「当用漢字字体表」で決まった略字以外にも、たとえば「灯

浊, 送, 仃」などのように, 略字にしてほしい字がまだいくつかあります。そういうのはいつ取り上げられるでしょうか。

【答】 国語審議会は, そういう世論の高まるのを待っているのです。筆記用につかうのは今でもさしつかえありません。

4 当用漢字別表教育漢字について

【問】 当用漢字別表はどのような方針で選定されましたか。

【答】 これについては 安藤主査委員長の総会への報告を次に掲げます。

教育漢字（当用漢字別表）

に関する主査委員長報告

安 藤 正 次

本委員会が付託を受けましたのは、ここに定められた当用漢字のうちから、特に基本的のものと認められるある数の漢字を選び、義務教育期間において教えられべき漢字の範囲を明らかにすることでございました。この問題は当用漢字の制定に伴って当然考えられなければならぬものであり、またその解決には急を要するものであります。当用漢字は一般社会で使う漢字の範囲を示したものであります。1850字は、義務教育期間内にそのすべてを教えるには、多きに過ぎるのであります。当用漢字の将来における整理はすでにその当初から約束されてはおりますが、その実現は急速に行われ得ません。義務教育本来のたてまえから申せば、その期間内において次の世代の一般国民が、社会人として文字生活を営むに不自

由のない程度の教養をになわなければなりませんので、したがって国民常用の漢字と義務教育期間に教えられるものとの合致は理想として望ましいことではありますが、右の事情によりましてそれが現実において不可能であるといたしますれば、当分の間は別に適切可能の対策をたてて、義務教育の本旨に添うのほかないのであります。その応急の処置として考えられますことは、当用漢字のうちから、これだけの漢字はぜひ義務教育期間において教えこんでおかなければならないと認められるものを選び、これを中心として、学習者の文字能力をつちかい、その文字常識を養って、他日の大成に導いていくということではありますが、前述のような調査が本委員会に付託されましたのも、けだしこの一つの線に沿ってのことと存ぜられます。本委員会は、こういう了解のもとに審議を進めてまいりました。主査委員会が組織されてから、ここに12か月、委員会の回を重ねますこと33回、さいわいに委員会各位の御精励によりまして、成案をうるに至りました。お手もとに出しました当用漢字別表は、すなわちその選定の結果でございます。

別表の漢字は、申すまでもなく義務教育期間の学習を目標として選ばれたものであります。目標をそこにおきましたので、学習者の知能の程度、学習の期間が、選定に対するきびしい制約となつてまいりました。負担の過重を避けることもじゅうぶんに考えなければならませんでした。おのずから字数の制限が問題となつてまいりました。しかしこの場合の制限は、すでに一応制限というわくの中に

おかれている当用漢字に、さらにもう一つのわくを加えるだけのように見られますが、実はこの二つのものは同心円的のものではないのであります。必ずしも、その性質を同じくしてはおりません。一は現在の一般社会の文字生活の簡易化を期しての制限 一は将来の社会の文字生活に適応させるため、教育的基礎付けをはかるための制限でありますから 前者が寛であり、後者が厳であるのはあやしまに足りませんが、前者の者場からは必要なもので、後者の立場からは不必要と認められるものがあります。現在の成人にとって重要性をもつもの、必ず教室において教えられなければならぬものとは申されません。したがって採否の標準にかれとこれの甲乙があります。なおまた他の場合においてもそうでありますように、われわれは、漢字教育の上においても、労を省いて最大の効果を収めるべきでありますから、いたずらに当用漢字に重きをおいて、数の多きをむさぼるがごときことがあってはならないのであります。さればと申して、みだりに負担の軽減に急ぎ、あまり多くをかな書きに移すようでは、次に来る世代の文字生活に不利・不便のかけをやどすことになりましょう。、本委員会は、第1にこの点について深く意を用いまして、多きに過ぎず、少なきに過ぎぬことを期した次第であります。

第2に、本委員会では、別表の漢字を選ぶに当りまして、それが義務教育期間内において、読み書きともにできるように指導することが必要なものであるかどうかについて、じゅうぶんに考慮を加え

たのであります。読み書きともにできるよう指導する漢字を一方に認めることは、その結果において、他方に、読めさえすればよいという漢字を認めることにもなりますが、漢字学習の本義から申せば、2類を対立させることは必ずしも適当でないという議論も出ましよう。しかし委員会もまた根本的にすべての漢字をこの二つに大別するというような見解をとったわけではありません。ただわれわれは、現実の段階におきましては、しばらくこれを一つの目安とすることが漢字の教育的処理をなめらかにする助けになるものと考えた次第であります。なお、これからの国語の教育には、読本のほかに、自由教材として新聞や雑誌も取り入れられることを考えますれば、読ませておくという程度の漢字というものも考慮のうちに加えておくのがよいとも申せましよう。

第3に、しからば読み書きともにできるよう指導する必要があるというのは、どういうものかと申しますと、要約すれば現在において最も普遍的であり、かつまた、将来において普遍的であることが望ましいもの、すなわち一般にだれでも知っていなければならない、だれにも読め、だれにも書けなければならない、したがってこれからの文字生活を営んでいこうとするものが、ぜひ学習しておかなければならないという条件を備えたものということになります。これだけでははっきりいたしませんから、以下実例について申し上げます。

1 日常の社会生活に直接の関係をもち、一般国民に親しみの深いもの

ただし、形・音・義のむずかしいものや、当用漢字におけるかな書きの条項に触れるものは、この限りではありません。

例 数関係の一二三四………万億

方位関係の 東西南北

季節関係の 春夏秋冬

行政区画に関する 都道府県郡市区町村

人倫に関する 父母親子兄弟姉妹夫妻

衣食に関する 衣版消綿糸飲食米麦穀飯粉菜茶塩酒住家屋

居室庭園門戸柱板堂店宿舍

徳目に関する 仁義礼智信忠孝節誠恩愛

色彩の 青黄赤白黒緑

植物の 木草竹花葉根幹芽

動物の 犬牛馬鳥魚貝虫蚕

鉱物の 金銀銅鉄砂石炭など

2 熟語構成の力が強く、それが広い範囲に及んでいるもの。

例 名 人名 氏名 名誉 名利

名称 名義 名人 名代

名刺 名流 名声

流 急流 清流 水流 一流 名流 上流 下流 流儀

流行 流域 流用 流産 流線型 流動体

在 在職 在位 在庫 在宅 在外 在留 近在 不在 所

在 現在 その他 最 極 細 要 不 用 など。

- 3 広く世に行われている平明な熟語の構成成分で、対照的意義を表わすそれぞれのもの。

例 因果 公私 左右 上下 主客 内外 自他 前後 損益
往復 加減 始終 収支 出入 生死 勝負 断続 得失
売買 貸借 進退 遠近 寒暑 強弱 曲直 軽重 高低
新古 多少 大小 長短 異同 など

次にどういう類の漢字がこの選定から除かれているかと申しますと、

- 1 時代の主流から遠ざかっているもの。甲乙丙、尺貫法関係の漢字など。

- 2 階層的なもの、局地的なもの。

×	×	×	×	×	×	×
官庁	通信	勅語	詔書	妥協	豪傑	傑作
典	古典	典型				
	×	×				
依	依存	依頼				

- 3 専門用語にしか関係をもたないもの

学術用語、専門用語は平易な文字によるか、かな書きによるこ

とが望ましいが、要するに別の取扱とする。

×	×	×	×	×	×	×
俳句	謡曲	狂言	緯度	凍上	恐慌	窯業など。

別表漢字として選定されました漢字は、881 字であります。これにつきましては、多すぎるという御意見もございましょうし、少

なすぎるという批評もございましょう。委員会といたしましても、それが最後の鉄案であって、1字も動かすことのできないものと申すのではございません。しかしこれは 委員会が 今まで世に現れました漢字の教育に関する各方面の調査・研究ならびにその実験報告を参考資料としながらも、委員会独自の立場からの慎重審議に基いた成果であります。しかも、委員各位は終始一貫、採否に関して1字をも、いやしくもされなかったのであります。

漢字と義務教育

【問】 教育漢字（当用漢字別表）881字を義務教育の期間に学んだだけで、社会に出たのちにも不自由はないのでしょうか。

【答】 881字は最も基本的かつ重要なもので、義務教育の期間中に必ず正しく読むことはもとより、書くこともできるように学ばせるべきものとして選ばれたものであります。

9年間の教科書には、それ以外の漢字も提出されることと思いますから、生徒が学習する漢字の数は相当なものとなりましょう。ただ881字以外のものは、読ませることを主眼とし、書取の練習などきびしく行わぬようにしてほしいとのたてまえであります。なお生徒は学校以外の読み物や人名・看板などからも相当の漢字を覚えるものと見て、義務教育が終わったときには、日刊新聞をびととおりに読むことは困難でないと思われます。またそのように教育されることになっています。

5 人名用漢字別表について

【問】 こどもの名まえに使う漢字は「当用漢字表」の範囲に限られているのですか。

【答】 戸籍法施行規則によって、「当用漢字表」(1850字)ならびに「人名用漢字別表」(92字)の範囲に限られています。

参考のため、「人名用漢字別表」と国語審議会の「人名漢字に関する声明書」とを、以下に掲げます。

人名用漢字別表

丑	丞	乃	之	也	互	亥	亦	享	亮	仙	伊	匡
卯	只	吾	呂	哉	嘉	圭	奈	宏	寅	尚	巖	巳
庄	弘	弥	彦	悌	敦	昌	晃	晋	智	暢	朋	杉
桂	桐	楠	橘	欣	欽	毅	浩	淳	熊	爾	猪	玲
琢	瑞	甚	睦	磨	磯	祐	祿	禎	稔	穰	綾	惣
聡	肇	胤	艶	蔦	藤	蘭	虎	蝶	輔	辰	郁	西
錦	鎌	靖	須	馨	駒	鯉	倜	鶴	鹿	麿	斉	龍
亀												

人名漢字に関する声明書

国 語 審 議 会

国民の読み書き能力を向上させ、教育を高めるためには、国語表

記法の改善が必要である。その具体的方法として、漢字の整理とその使用の調整とが必要であることも、また動かしがたい方向である。国語審議会は、国語国字問題に関して、常にこの原則が守られることを要望し、最近問題になっている人名の表記についても、これを念頭において考えるべきであると信ずるものである。

戸籍法において、子の名に用いる漢字が限定されるようになったのは、昭和22年12月22日公布の戸籍法第50条に、「子の名には、常用平易な文字を用いなければならない。常用平易な文字の範囲は、命令でこれを定める。」とし、同月29日公布の司法省令・戸籍法施行規則第60条において、常用平易な文字を (1)当用漢字表に掲げる漢字 (2)かたかなまたはひらがな(変体がなを除く。)としたことに基くのである。

当用漢字表は政府の採択するところとなり、昭和21年11月16日内閣訓令によって実施の運びとなったのであるが、当時の国語審議会は、当用漢字の選定にあたって、固有名詞(特に地名・人名)に用いられる漢字については、法規上その他に関係するところが多いので、別に考慮することとしたのである。しかしながら、これは主として既存の固有名詞についてのことであったが、これから新しくつけられる子の名や、官庁・会社などの名称は、なるべく当用漢字表によることが望ましいという態度をとったのであった。戸籍法および同施行規則が制定されたのは、それから1年を経た後のことであって、この法令による処置は、国語政策の一つとしての当用漢字

表制定の趣旨が、学校教育においても、一般社会においても、すでに相当に理解され、かつ実践されている事実 に即して、これを推進する目的のもとにとられたものであろう。

いったい子の名というものは、その社会性の上からみて、常用平易な文字を選んでつけることが、その子の将来のためであるということは、社会通念として常識的に了解されることであろう。そして一般に漢字の読み書きの困難な点から、その整理を必要とする事情を考え合わせれば、子の名に用いる漢字を当用漢字によることにしたことは、原則として国語政策の方向に合致するものと言えよう。

しかるに、最近この問題に対して論議が起り、国会においても審議されることになった。国語審議会においても、固有名詞部会の先議事項として、この問題を取り上げ、従来人名に用いられることの多かった漢字を資料として審議し、慎重に検討を加えた結果、別紙に掲げる程度の漢字は、当用漢字表以外に人名に用いてさしつかえないと認めた。子の名の文字には、社会慣習や特殊事情もあるので、現在のところなお、当用漢字表以外に若干の漢字の使用はやむを得ないと考えるからである。

子の名に用いる漢字が社会慣習によるものであり、またそれには特殊な事情の存することも事実であるが、かりに子の名に用いる漢字が無制限に認められるとしても、学校における漢字教育が、現在においても将来においても、学習上そこまで及ぼしにくい事情にあるとすれば、当用漢字の基準に従うことが、その子の幸福であるこ

とを知らなければならない。地名・人名の表記については、さらに一歩を進めて、かながきにすることが最も適当であるという提唱も、つとに行われている。これは読み方の不明確な地名・人名が、社会生活に各種の不便を伴うからである。このことも、今後研究すべきであろう。

■国語審議会としては、社会一般が国語改善の重要性を認識し、国語の平易化に協力して、文化の民主化に寄与することを期待するとともに、人名の文字についても、その社会性を理解し、子の名に用いる漢字が良識をもって選定されることを念願するものである。

6 現代かなづかいについて

【問】 現代かなづかいはどんな方針で決定されましたか。

【答】 これについては、安藤主査委員長の総会への報告を次に掲げます。

現代かなづかいに関する主査委員長報告

安 藤 正 次

1

かなづかいに関する主査委員会の経過ならびに審議の結果を御報告申し上げます。

まず申し上げるべきは、本委員会の組織についてであります。本委員会は、初め、有光・時枝・山本・神保・金田一・清水・河井・井手・藤村・小幡・安藤の 11 委員で組織されたのでありますが、その後さらに、東条・松坂・佐伯・石黒・岩淵・西尾・服部・宮川の 8 委員を加えまして、計 19 名となりました。主査委員長は皆さまの御推薦によりまして、わたくしがその任にあたることになりました。

委員会は、6 月 11 日を第 1 回といたしまして、9 月の初めまでに会合を重ねること 12 回、慎重審議の末、ようやく成案を得ましたの

で、ここにこれを「現代かなづかい」と名づけて、御報告申し上げることとなったのであります。本日これについて御報告申し上げるに当りまして、終始一貫、この仕事に御協力を賜わった委員各位を初め、幹事・書記のかたがたの御労苦に対して、深い感謝の念を表せざるを得ません。お手もとにございます「現代かなづかい」の一は、この御労苦の成果にほかならないのであります。

2

さて、次に申し上げたいのは、本委員会はかなづかいというものをどう考えたか、これが審議に当ってどういう態度をとったか、これが処理についてどういう方針をたてたかということです。

かなづかいの問題は、国語・国字に関する他の諸問題と同じく明治初年以来の懸案であり、しかも未解決のままで今日に及んでいることは、御承知のとおりであります。国語審議会が今回この問題を取り上げて委員会に付託されるに至りましたのも、これが単に漢字の制限と不可分の関係をもっているということばかりからでなく、これが解決はまた、書きことばの簡易化の一環として、教育上の負担の軽減、一般民衆の知能の向上に重要な関係をもち、ひいては、国語の改革という大きな問題にも影響を及ぼすがゆえと存ぜられるのであります。この意味において、本委員会もまた、この問題をどう取り扱うかに当っては、じゅうぶんにかなづかいの本質を考慮いたしまして、一面には応急の処理を講じながらも、また他の一面においては、未来への展開に違算のないよう、国語の進運を助けること

のできるようにとの心構えをたてたしだいであります。

まず、かなづかいというものにつきましては、国語をかなで書く場合の準則がかなづかいであると解する大体論は、おそらく何人も異存のないことと考えますが、その準則の基くところをいずれにおくか、これをいにしえに求めるか、今に求めるかにおいて、諸家の意見は必ずしも一つに帰していないのであります。

現在、学校の教科書などに採用されておりますかなづかいは、復古かなづかいもしくは古典かなづかいと呼ばれておりますように、その準則のよりどころをいにしえにしております。これは平安朝の言文二途に分れなかった時代の文献に見えているかな書きの実績をよりどころとして、帰納的にそれぞれのことばを書く場合の準則を定めたものであります。平安朝のことばに関するかぎり、これが權威はじゅうぶんに認められてしかるべきものであります。さてこれが後代にまでその準則の力を及ぼしうべきかは疑問であります。

これより以前、奈良朝にもその時代の国語を象徴するかなづかいの存在していたことが帰納的に認められております。学者のいわゆる特殊かなづかいのごときは、ことに顕著なものであります。それも、ことばにおける音韻の識別とその消長を一つにしておりましてその拘束の力は後代に及んでいないのであります。これが自然の理法であります。

しかしながら、あるいはまた、平安朝のかなづかいは、当代におけるかなの普及に伴って定着性をもつようになったばかりでなく、

その時代のかな文化は遠く後世にその影響を及ぼしているから、それらの点から見て、今においてもなお、この時代のかなづかいは一般の準則として認められる資格をもつという説もあるかもしれませんが。しかし、平安朝はいかにもかな文学の盛んであった時代には違いありませんが、それは社会のある階層においてであったといってもよいのであって、一般の社会人は、日記・記録体の文章、尺牘^{せきとく}、往来体の文章、あるいは漢詩文などに親しむことが多いというのが当時の実情であったと思われますが、こういう各種文体の対立と、わが国字が元来複国字制で、漢字で書いてもよく、かなで書いてもよく、そのかなもひらがな・かたかなのいずれでもよいことになっているのとあいまって、かなづかいに定着性を与えるような余裕はなかったことと考えられます。むしろそういう次第から、書かれたことばと語られることばとは常に遊離した状態におかれたので、それゆえにこそ、ついに言文相分れることにもなったのであります。鎌倉時代の普通に定家かなづかいといわれている「行阿仮名文字遣」のできた由来を尋ね、またその内容を調べてみましても、平安朝のかなづかいがこういう王朝文学の勢力圏内にある人々の間にすら、その規範の力をもち得なかったことが知られます。

さらにまた、このかなづかいの実体が、江戸時代の国学者の研究によってはじめて明らかにされたことでも、これは裏書きされるのであります。

しかしながら、その江戸時代においても、このかなづかいは、わ

ずかに一部の学者の間に信奉者（実践者）をもっていたに過ぎないし、明治時代にはいって、これが学校の教科に取り入れられて久しきにわたること前に述べたとおりであります。70年の歳月を経ているにもかかわらず、まだまだ、かなづかいの定着性をもつことができず、あいかわらず遊離の状態におかれております。

以上のようないろいろの事実を、とり集めて考えてみますのに、わたくしどもは、現代のことばをかなで書き表わす場合の準則というものは、現実には何ももっていないといえと存じます。今までのかなづかいの準則と認められる平安朝中期ごろまでの実績をよりどころとしたものは、これが言文二途に分れた後までもずっと関係をもっているといったとしても、それは、文語の系統に属すべきもののなのであります。したがって現代においても、文語の範囲では今までのかなづかいを認めてよいと存じますが、口語体のものにおいて、今までのかなづかいによるのは不合理であります。その不合理がいろいろの問題を生んでおります。口語の世界にあっては、口語それ自身のうちに、かなで書く場合の準則が求められるべきものと信じます。それが合理的であります。そこで委員会では、現代社会の実情と要求とに応じまして、今までのかなづかいに対して現代文の口語体のものに適用されるべき新しいかなづかいを制定するのがその当を得たことと考えたのであります。この制定に当りまして準則のよりどころを今に求め、現代語の音韻意識によって書き分けることを本体といたしましたことは申すまでもございません。これ

を現代かなづかいと名づけましたのもこの意味からであります。

なお本委員会では、かなづかいの上に、字音・国語の別を立てないことにいたしました。従来の字音かなづかいは、漢字の一字一字の字音をあきらかにするのが主たる目的であるかに見られます。しかしわれわれの準則を見いだそうとするのは、ひとしく国語として受け取られるものについてであり、字音語を特に区別する必要がないからであります。

またここに一言しておくべきことは除外例についてであります。この種の準則には、除外例を設けないほうが、取扱の上からも、体制の上からもつごうがよいのではありますが、かなづかいのような問題は、冷やかな理論だけでかたづけられるものではありません。そこには国民感情や書記習慣の顧慮されなければならぬものがあります。本かなづかいに認めてあります除外例のうちには、伝統的の書記習慣をしばらく存しておくという類のものがあ、あるいは、まだ一般的の書記習慣とはならないが、まずこれを取り上げておくという類のものがあって、必ずしも一様ではありませんが、要するにこれは、そこにこれだけの余裕を存して国民の総意に訴えるという意図に出でたものであります。その余裕は、要するに明日のための余裕であります。

3

次に申し上げるべきは表記に関する通則についてであります。

表記に関する通則は、長音を表わす場合^{ようおん}拗音を表わす場合、促音

を表わす場合の三つであります。

まず、長音を表わすには、古くから

アにはア イにはヒ・イまたはホ

ウにはフまたはウ エにはイ・エまたはヘ

オにはフ・ウまたはヲ・オ

を使っております。このかなづかいでは

アにはア イにはイ ウにはウ

エにはエ オにはウ

を採用することにいたしました。これは主として伝統的の書記習慣を考慮したからであります。ただしオの場合には、ウのほかにオの使われたのもかなり古くからのことでもありますから、ウを書くのを本則としましてオの使用をも認めることにいたしました次第であります。

なお、長音符というべきものに「ー」があります。これは外国語を書き表わす場合などに多く使われておりますが、これもある範囲には認めてもよいかと存ぜられます。こうして国民の選択にまつのも余裕をおくやり方であります。「ー」の使用も古くその例が無いのではありません。山槐記^{中山忠親}治承二年正月十八日の条に「^{マート}的懸^{一カケ}如此仰也。マ字ト字間長。ト字カ字又同。カケ字サカケサカリ音ニ引ツ、ケ仰也。不召的懸名」とあります。新井白石は東音譜に側線を使っております。

送声 送声者送気声也。不可以混余声

本音不転。以送其気即送声也

ア イ ウ エ ヲ カ キ ク ケ コ

なお、長音のうちで問題となるべきものは、エ列の長音の場合であります。この場合のものは国語ではまれであります。「[○]永遠」「[○]経営」のごときはエイ・ケイ・エイであるからそのとおりでエイ・ケイ・エイと書くのを本体といたします。^{ようおん}拗音につきましては、や ゆ よ を右下に小さく書くことを本体といたしました。古く^{キァ} ^{チョ} などの例もありますが、や・ゆ・よのほうが普通であります。

拗音のうちには、^{くわ} ^{ぐわ} の類がありますが、これは、このかなづかいでは、^か ^が に統一することにいたしました。

促音を表わすには、やはり普通の慣習に従いまして、^っ を右下に小さく書くことを本体といたしました。

拗音・促音を右下に小さく書くことが印刷その他の関係で不可能である場合も考慮されております。

4

次に本案の細目にわたって御説明申し上げます。

(1) 全般的に音韻上の区別の失われているもの

第一 ゐ ゑ を は、い え お と書く。

ただし助詞のをを除く。

これは音韻上の区別の失われたものを一つにいたしましたのであります。

和行のゐ ゑ をは、現代においては、その音韻的特質を失いまして、ア行のい え おと同じように発音されるのでありますから、

これをい え おに統一することにいたしました。ただ助詞のをは一方では古くからの書記習慣を顧慮するという点から、一方では特に助詞専用のかなとして使うのに他に紛れるおそれがないという点から、これを存しておくことにいたしました。

(2) 地域的に音韻上の区別の失われているもの

第二 くわ ぐわはか がと書く

第三 ぢ づはじ ずと書く

(3) 音韻の変化

第四——第九

これは、語中における波行音の問題であります。

波行動詞の活用語尾もここにはいります。

ただし、これに は への除外例があります。

(4) 長音 第十 —— 第二十

ゆう	いう	いふ	ゆふ
ええ			
おう	あう	わう	あふ ほう
こう	かう	くわう	かふ こふ
ごう	がう	ぐわう	がふ ごふ
そう	さう	さふ	

ぞう	ざう	ざふ	
とう	たう	たふ	
どう	だう		
のう	なう	なふ	のふ

「昨日」の「きのふ」は「きのう」と書きます。

ほう	はう	はふ	はう
ぼう	ばう	ばふ	
ぽう	ぱう	ぽふ	
もう	まう		
よう	やう	えう	えふ
ろう	らう	らふ	

(5) 拗長音

第二十一 — 第三十三

ウ列

きゅう	きう	きふ
ぎゅう	ぎう	
しゅう	しう	しふ
じゅう	じう	じふ
	ぢゅう	
ちゅう	ちう	
にゅう	にう	にふ

ひゅう	ひう	
びゅう	びう	
りゅう	りう	りふ

オ列

きょう	きやう	けう	けふ
ぎょう	ぎやう	げう	げふ
しょう	しやう	せう	せふ
じょう	じやう	ぜう	
	ぢやう	でう	でふ
ちょう	ちやう	てう	てふ
にょう	ねう		
ひょう	ひやう	へう	
びょう	びやう	べう	
みょう	みやう	めう	
りょう	りやう	れう	れふ

5.

以上で一応現代かなづかいに関する御説明を終えたのでありますが、ここに終りにのぞみまして、本主査委員会の当局に対する切なる要望を申し添えておきます。

前にも述べましたように、このかなづかいは、現代語をかなで書く場合の準則たるべきことを期したものでありまして、これがさい

わいに本総会の御賛同を得、広く世に行われることになりましたれば、書きことばの簡易化に資することの多きはもちろん、教育上の負担の軽減、社会民衆の知能の向上に多大の影響を及ぼすことは、わたくしどもの深く信じて疑わざるところであります。わたくしどもはさらにこの新しいかなづかいの制定を機として、このかなづかいに定着性を与えてこれをりっぱな現代かなづかいに盛り立てて行くことを念願するものであります。現代かなづかいはその準則は簡単であり、ほとんど迷うところがないといえます。しかし、その簡単なもの、迷いなしと思われるもの必ずしも常にそのとおりにはありません。現代語の教育を高め、現代語の認識を強めるの要はここにあるのであります。うらむらくは、現下のわが国における現代語の調査研究はきわめて貧弱であります。広くこれを国語政策の立場から見ましても、国語教育の実際から見ましても、これを今日のまに放任しておくのは文化国家の恥辱であります。標準語制定という大きな問題を初め各種の考査を要する問題が山積いたしております。それらの問題の基礎となるべき調査研究はゆるがせにすべきではありません。わたくしは端的に申し上げます。わたくしどもは、政府当局がすみやかに有力な現代語の調査研究機関の設立に着手されることを要望するのであります。しかもこれは総合的の体制を備えたものでなければならぬと存じます。これが根本の問題であります。

以下申し述べる事がらは、これから見ますれば枝葉のことではあります。これまた急を要する意味において申し添えることにいた

します。

その一つは、現代かなづかいは、文法体系に関係をもつことが少なくないのでありますから、従来の国語文法の改訂について応急の処置を講ぜられたいこと。

その二つには、外国語をかなで書く場合の準則はこれに含まれていませんから、それについては別途委員会を設けてしかるべく制定の方法を講ぜられたいこと、すでに国語になりきっている外来語が現代かなづかいによるべきことはいうまでもありません。

その三つは、送りがな法、分ち書き法、句とう法などの制定をまた閑却されるべきでないこと等であります。

かなづかいの意義

【問】 かなづかいというものは、発音記号ではなく、正書法に関するものです。現代かなづかいもまた、かなづかいという以上、正書法であるし、一つの語は、いつ、どこで、だれが書いても同じものであるべきです。それを、地方によって、「クッ・カ」「ヂ・ジ」など、発音を区別して書き分けてもよいと認めているのは、正書法にも反するし、標準的発音に基くという精神とも相入れないものです。また、ある新聞は、「うなづく」「ぬかづく」「ひざまづく」と書き、他の新聞は、「うなずく」「ぬかずく」「ひざまずく」としているといった調子です。また「世界じゅう」「一日じゅう」があるかと思えば、「世界ぢゅう」「一日

ぢゅう」があります。文部省の御意見を伺いたいのです。

【答】「現代かなづかい」の根本の方針はそのまえがきにいられているように——現代語音に基いて現代語をかなで書き表わす場合の準則を示す——ことにあるのです。そしてわれわれ現代の国民にとって特に次代の日本を築くべき多くの少年・少女にとって、「現代語音を基準とする」かなづかいが、国語の書き方をやさしくし、能率的にすることは申すまでもないと思います。

「現代かなづかい」が国民特に少年たちを古いかなづかいの重荷から解放することの意義は大きいし、国語がほんとうに国民の国語になっていく上に役だつことは必ず大きいと信じます。地方によって、「クワ・カ」「ヂ・ジ」等をいい分けているところはかきわけてもさしつかえないとしておりますが、指摘しておられるように、厳密に一定したいわゆる正書法の理想からいえば、確かに細則の定め方において妥協的なところがあるといえます。

これは理論上の一貫性に縛られて、かえって多くの人が実行する上にぐあいが悪いようであってはならない。こういう心配りから国語審議会では融通性をもたせたものと思います。しかしみんなが守るべき本則・基準を示した上での妥協なのです。ですから、「クワ・カ」「ヂ・ジ」の例についていえば、「カ」「ジ」と書くのが基準ですから、このほうが望ましいのですし、やが

て国民全体に一定の書き方が行われることになりましょう。こういう一部の妥協性によって、「現代かなづかい」の意義が失われるとはいえません。

次に指摘されたように2語の連合によって生じた「ぢ・づ」は「ぢ・づ」と書くという細則については、それぞれの解釈の違いによって、「うなづ(づ)く、ひざまづ(づ)く、世界じ(ぢ)ゅう」とのように違いが生ずるわけで、しかもそれぞれ理論的には決して誤りとは認められません。こうした違いの生ずることばはそうたくさんあるわけではありませんが、こうした種類のことばには具体的に書き方を定めることが必要と思います。文部省でもこれについては部内で論議を重ね、だいたいの基準をつくってこれを教科書に採用して態度を明らかにしました。

指摘された「世界ぢゅう」か「世界じゅう」かは、その結果、公的な書き物には今のところ「じゅう」を採用することに定めたのです。したがって、こどもに質問された場合には教科書どおりに「じゅう」と教えてくださればよいのです。

こうした問題は学問的な考え方の違いによって意見の分れることもあります。お互に研究し合うことによってよき一致点を見いださうるものと信じます。これは国民全体の問題であり、要は現代と将来の日本国民のためによき国語の書き方をつくりあげようという仕事ですから。

不統一なかなづかい

【問】 こどもの本を見たところ、社会科教科書に、「わが国土」というのがあって、その中に焼津・会津・飯塚などの地名が「やいづ」「あいづ」「いいづか」とふりがながしてあり、また別の教科書には、「やいず」「あいず」「いいずか」となっています。いったいどちらが正しいのですか。

【答】 焼津・会津などは津の文字から濁って「づ」とするのが漢字使用の常識的な考え方ですが、一方固有名詞としてこれらの地名を考えたとき、漢字の観念を離れて発音そのものから、「やいず」「あいず」とかな書きする考え方も成立します。

また現代かなづかいには2語連語による濁音として貝塚・才槌は、「づ」であって、「ず」ではないと規定してありますが、手綱・手力などの手は一種の接頭語とも考えられて、これを2語連語と考えるか、複合した1語と考えるかによって、「たづな」「たちから」と解すること、また「たずな」「たじから」と書くことも許されます。いずれにしても、「づ・ず」「じ・ち」の書き分けは現代かなづかいの最も大きな問題で、まだはっきりした解決は与えられていません。現段階では両方とも正しいものと思います。ただこの問題について、教科書の間に不統一のあることはこまったことでして、今後統一に向かうよう努力するつもりです。

助詞「は」と「へ」

【問】 現代かなづかいで、「わたくしはそこへ行く」の「は」は当然「わ」に、「へ」は「え」とすべきであるのに、へんに妥協しているのは、その趣旨を考えると、どうも釈然としないものがあります。

【答】 現代かなづかいで、助詞の「は」「へ」「を」を除外としたのは、一般に深く目の印象にはいっていることとて、これを発音どおりにすると、反対が多いことも顧慮したものでありますが、将来は発音どおりになるかもしれません。だが当分はあのとおりで進むことに国語審議会では全員一致して決めたものであります。けれど除外例を設けてありますから、「わたくしわ」でも認めることになっています。

「は」「へ」と「わ」「え」

【問】 助詞の「は」「へ」も「わ」「え」と書くのがよいと思いますが、それが実現する可能性と時期について見とおしを教えてください。

【答】 「は」「へ」を「わ」「え」にするという可能性なり時期なりについては、現在、賛否両論がありますので、今日のところまだ何とも予想がつきません。

「ゆう」か「いう」か

【問】 「言う」は「ユウ」と発音するのに、新かなづかいで「いう」と書くのはなぜですか。その活用をも示してください。

【答】 「言う」は「ユウ」と発音するようですが、それを「ゆう」と書くと、文法上、動詞の活用の説明が複雑になるので、特に「いう」と書くことになっています。

なお動詞「いう」の活用は次のとおりです。

い	{	わ ^{ナイ}
		い ^{マス}
		う
		え ^バ
		お ^フ (または おう)

「いおう」の「おう」を分解して、語尾の「お」と助動詞の「う」とに分けて考えることも、また「おう」という一つの語尾と考えることもできます。

「とおる」か「とうる」か

【問】 「通る」は「とうる」ではいけませんか。いけないとすればその理由はどうか。

【答】 「通る」は 現行の規則では、「とおる」と書くことになっています。それは、旧かなづかいで「とほ」と書いてあるとこ

ろ（音節）は、長音ではないという考え方から出ています。

「きれい」か「きれえ」か

【問】 「きれい」「せんせい」などは「きれえ」「せんせえ」と書くのが正しくはありませんか。

【答】 「きれい」「せんせい」のかなづかいは、字音の「麗」「生」のかなづかい（従来のまま）によったのですが、その発音は、エイ（二色母音）でもエー（長母音）でもよいことになっています。

なおこれは、ローマ字のつづり方で、“kirei, sensei”などと書いて、しかも〔キレイ〕とも〔キレー〕とも読んでいるのと一致しています。

「地」は「ぢ」か「じ」か

【問】 「地震」「地面」または「布地」などの「地」を、新かなづかいで「じ」と書くのはなぜですか。こどもには「^ち地」に対して「ぢ」と書くことに賛成するものがありますが。

【答】 「地」の音は、元来、漢音チ、呉音ヂで、そのヂは連濁のヂではありません。もとの（すなわち本来固有の、連濁でない）音です。

現代かなづかいでは、ヂ・ジの音を区別せず、連濁の「ぢ」のほかは、すべて「じ」と書くことになっていますから、

^じ地震 この服は ^じ地 がよい。

なども、みな「じ」と書くのです。

また「服地」「生地」などの「地」も、この「^じ地」であって、連濁の「ぢ」とは認めず、したがって「布^じ地」などの場合の「地」のかなづかいも「じ」と書くのです。

「はなぢ」か「はなじ」か

【問】 「鼻血」は「はなじ」ではありませんか。

【答】 「鼻血」は「はなぢ」です。その「ぢ」は2語連合によって「ち」が濁ったものです。

「づつ」か「ずつ」か

【問】 「一つづつ」と書くのが正しいですか。「一つずつ」と書くのが正しいですか。

【答】 「ずつ」です。これは「つつ」の連濁でなく、「ずつ」という接尾語になっているものと解釈しているのです。

「まぢか」か「まじか」か

【問】 「卒業の日も {まぢか} にせまった。」で、どちらを選択するかという問題が出ました。どちらが正しいのでしょうか。

【答】 「ま近に」で「まぢか」です。「手近」「身近」なども、みな「手ぢか」「身ぢか」です。

なお「ま近」の「ま」は、一般に「^ま間」の意味に解して「間

近」と書いています。もっとも、それがほんとうの語原かどうかは未詳です。

「世界じゅう」か「世界ぢゅう」か

【問】 「世界中」は「世界ぢゅう」と書くのが正しくはありませんか。

【答】 「うち中」「村中」などの「中」は、すでに接尾語として固定しており、初めから〔ジュウ〕という音だと見て、文部省著作教科書には「うちじゅう」「世界じゅう」というふうに書いてあります。

「基づく」か「基く」か

【問】 これまで普通に「基く」と書いていましたが、近ごろは「基づく」と書いているのを見受けます。どちらがよいのですか。

【答】 今日でも公用文では、「基く」と書くことになっていますが、教科書では「基づく」と書いています。しかし これなどはなるべく「もとづく」とかなで書いてほしいことばです。

「魚づくし」か「魚ずくし」か

【問】 「魚づくし」と書いてある本と「魚ずくし」と書いてある本とがあります。どちらが正しいでしょうか。

【答】 現行のきまりとしては、「魚^つ尽し」の連濁として、「魚づく

し」と書くのが正しいでしょう。なぜならば、「魚」と「尽し」との2語に分けて考えられるからです。

「腕づく」か「腕ずく」か

【問】 「腕ずく」の「ずく」は何の意味ですか。そして、それは「ずく」ですか「づく」ですか。

【答】 「腕ずくで来い。」というような文句の中で、その「腕ずく」ということばの意味はわかりますが、その中の「ずく」というのはどういうことかちょっとわからなくなっています。そういうふうに、だれでもすぐにわからないような場合には、すべて「ず」に書けばよいのです。

四段活用か五段活用か

【問】 「書く」という動詞は、「か・き・く・け」の4段に活用するから、四段活用と名づけられていたが、現代かなづかいでは、「書こう」という書き方ができたから、語尾は「か・き・く・け・こ」の5段に活用するようになりました。したがって、5段活用というべきなのに、文法教科書によっては四段活用にしています。未然形という一つのわくに、「か」「こ」の2字があるのは、現代かなづかいのつじつまが合わない点ではないのですか。

また、「大きい」のかなづかいを、「おう」と区別して、「お

お」と書けといったり、同じ「つめ」を、「なまづめ」「ひずめ」と書き分けさせるなど、現代かなづかいには無理が多いようです。

【答】(1) 現代かなづかいで書く文章の上に新しい口語文法を立てる以上、これまでの四段活用を五段活用と呼ぶこともあり得ることで、現に大正5年、国語調査委員会編の「口語法」でも五段活用としてあります。現行の文部省著作「中等文法」では、文語法との関連と、これまでの活用表の立て方のわく内で説明しようというたてまえから、従来のまま四段活用としてありますが、これは新かなづかいでは、「オ」の段にも活用するという文法的事実を曲げているものではありません。そして、これを「ア」の段の活用語尾と合わせて一つの未然形の中に並べておきます。一つの活用形の中に二つの活用語尾を並べてはいけないということはなく、これまでも未然形に「し・せ」または「し・せ・さ」を並べた例があります。それと同時に、未然形をアの段とオの段とに分けて説明する人があっても、さしつかえないはずです。これらのことは、文法の説明上の問題であって、かなづかいの問題ではありません。

(2) 「大きく」「多く」などの「おお」の書き方は、「お」の長音ではなくて「おお」であるという考えに基いたものであります。

(4) 「蹄」を「ひずめ」と書けということはどこにも規定し

ではありません。文部省著作教科書では、これを「ひ」と「つめ」とに分解して考えることを必ずしも生徒に要求しないというたてまえで「ひずめ」と書いたままであって、これを分解して「ひづめ」と書くこともできます。

それでは1語に2種の表記法があって困るではないかということになりますが、この類の語はきわめて少数で、それはわれわれが一般に使っているうちに自然に落ち着くものと考えられます。

7 これからの敬語について

【問】 「これからの敬語」は、どんな方針と審議の経過で決められたのですか。

【答】 昭和25年に改組された新しい国語審議会では、部会の一つとして敬語の調査に関する部会を設け、同年の6月から審議を始めましたが 越えて27年の4月に委員の任期が満了するのを機会に、一応、それまでの決定事項をとりまとめて総会にかけたものです。その際、金田一部会長からの経過報告の要旨を次に掲げておきますから、それを参照してください。

「これからの敬語」審議経過報告（要旨）

敬語部会長 金 田 一 京 助

国語審議会の敬語部会では、その第1回の会合で、まず、次の2説について審議しました。

- 1 敬語法は日本語の美しい特徴であるから、これからも永久に保存していかなければならない。
- 2 敬語法は封建時代の遺習であるから、これからの民主主義の世の中では 当然清算すべきものである。

審議の結果 次の第3説に落ち着きました。

- 3 民主主義の基本は、個人が互に他の個人を尊敬するところにある。その尊敬の心持を表わすのが敬語法であるから、これからの世の中にも、ある程度の敬語は有用である。

そして現在の敬語法の実状について、いろいろな角度から検討した結果、次の方針で審議を進めていくことになりました。

現代における敬語法の行き過ぎを戒め、誤用を正し、できるだけ平明、簡素な形に整理する。

かくして広く各種の資料によって調査審議し、なおかつ今日でも調査審議を続行しているのでありますが、その中から、いわば第1次の報告として、別冊「これからの敬語」をまとめたわけでありす。

【問】 「これからの敬語」は、どんな内容ですか。

【答】 今度国語審議会から文部大臣へ建議した「これからの敬語」は、敬語の純化に関する基本方針4か条と、その実践項目12か条とからなっていますが、これによって、これからの新しい時代に即した敬語のあり方の大綱が示され、かつ、これまでわたしたちが迷っていたいくつかの問題についても解決の指針が与えられたわけです。

たとえば日本語の代名詞について、自分をさすことばとしては「わたくし」があり「わたし」があり「ぼく」があり「おれ」があり、また相手をさすことばとしては「あなた」「きみ」「おまえ」「先生」「貴殿」「貴下」など、そのほかいろいろあ

って、ちょっと外人からアイ(I)とユウ(You)とにあたる日本語は何かと問われても、ひとくちには答えられないで、いちいち注釈をつけていたのを、これからはすぐに「わたし」「あなた」と答えられるようになりました。もっとも「わたくし」なども、改まった場合の形としてちゃんと使われるのですから、けっして、ことばを統制するとか制限するとかいったようなものでないということを、どうか誤解のないようにしていただきたいと思います。

特に「これからの敬語」の取り扱っているのは、広い社会的立場におけることばづかいについてであって、地方地方のことばや個人の私生活におけることばづかいについては触れていないのでありますから、その点もよろしく了解していただきたいと思います。

【問】 「これからの敬語」は強制ですか。

【答】 今度国語審議会から文部大臣に建議された「これからの敬語」の使い方については、さいわいに世論の支持を受けておりますが、中にはその主旨を誤解しているかたもありますので、一言申し上げておきたいと思います。

「これからの敬語」は、これまでの敬語が古い時代に発達したままであって、今の新しい時代にはあわないところがありますから、それを適当に調節しようというのが根本の主旨であります。そしてその主旨が、自然に社会常識となって、おのずか

らことばが改まっていことを望んでいるのでありまして、何も今すぐに、これこれのことばを使ってはいけないというような法律でも強制でもないのであります。

けれどもそうかといってことばの問題は、全然自由に放っておいてよいものであるかどうか。たとえば、くだものなる木を放っておきますと枝や葉ばかり茂って実がよくなりません。それにたくさん実をならせるためには適当に刈り込みを行わなければなりません。すべて国語を整理するという仕事は、ほんとうによい実をたくさんならせるための刈り込み作業のようなものであります。

最近あるところで、ひとりの婦人の来訪者が、「オイコラ、上衣をぬげ。がいとうをぬぐ規則を知らんのか。」といわれたという実地報告が公にされていますが、そうした「官尊民卑」の旧時代のことばづかいを、今の「民主」時代にもちこしている例が現にあるのです。「これからの敬語」は、こうした官尊民卑や男尊女卑など、そのほか、いろいろふつごうな考え方に基いてできている旧時代のことばづかいを改めて、すべての人が互に他の基本的人格を尊重する精神によって、新しい時代の敬語の使い方をうち立てていこうとするものでありますから、どうか、皆さんのご協力を得たいと思います。

「社長」と「社長さん」

【問】 「社長」などに「さん」をつけてはいけないのですか。

【答】 これまで「社長さん」といっているところでは、それで、いっとうさしつかえありません。ただ、なんでも「さん」をつけないければ尊敬も親しみも表わせないというわけのものではなくて、現に広い世の中には「社長、社長」と言っていて、それでけっこう社員全体が 社長に対する尊敬と親しみの心持を表わして、などやかにやっている例もあるということを、一言申し添えておきます。

8 外国語・外来語の表記について

【問】 国語審議会では、外来語や外国地名の表記について、「ファ・フィ・フェ・フォ」を「ハ・ヒ・ヘ・ホ」, 「ヴァ・ヴィ・ヴ・ヴェ・ヴォ」を「バ・ビ・ブ・ベ・ボ」と書くのを原則とし, 「ティ・ディ」も「チ・ジ」とすると決定したそうですが, 外来語の表記としては, 「ファ・フィ・フェ・フォ」「ヴァ・ヴィ・ヴ・ヴェ・ヴォ」「ティ・ディ」を採るべきではないでしょうか。

【答】 報道の一部不正確から誤り伝えられている点があるので, 国語審議会から学術用語分科審議会あての回答文を載せます。

1 外国語・外来語の表記について

- a) 外来語をかな書きにする場合, さしつかえないかぎり「ファ」「フィ」「フェ」「フォ」・「ヴァ」「ヴィ」「ヴ」「ヴェ」「ヴォ」の代りに, 「ハ」「ヒ」「ヘ」「ホ」・「バ」「ビ」「ブ」「ベ」「ボ」と書く。

例 ホルマリン プラットホーム

バイオリン ビタミン

ベランダ ボルト

- b) 外来語をかな書きにする場合, さしつかえないかぎり, 「テ

ィ」「ディ」の代りに、「チ」「ジ」と書く。

例 チンキ チーム

ラジオ ジレンマ

- c) 外来語および外国語の地名・人名をかな書きにする場合、原語のつづりにおける ia の a は原則として「ア」と書く。

例 ピアノ ダイアル

アジア イタリア

- d) 外来語および外国の地名・人名の表記の一般方針については、今後なお審議する予定である。

2 英語語尾の長音符号について

原語のつづりの終りの er, or, ar などかな書きにする場合には、長音符号「ー」を用いる。ただし、省く慣用のあるものや、これから造る術語では、必ずしもつけなくてよい。

例 ライター エレベーター

ハンマ スリッパ ドア

エネルギー エントロピー

3 術語のなか書きと送りがなについて

- a) 特に術語であることを明らかにしたい場合には、かな書きの部分はかたかなにしてもよい。

例 早メ点火 サビ止ペイント

- b) 術語の送りがなは、難読・誤読を避けるに必要なかなを送る。

例 曲ゲモーメント 突合せ継手

伸び率 折り尺

(別紙参照)

(別 紙)

国語審議会では、学術用語分科審議会から「学術用語の表記について」という問合せがあったので、術語部会においてこれの回答を作成することとした。術語部会は単独あるいは表記部会と合同で審議を進め、一応の成案を得たので、これを第17回総会に提出した。同総会ではこれを正式に決定し、今般回答する運びとなったのである。以下回答に補足して簡単な説明をしるす。

1 外国語・外来語の表記について

外国語・外来語の表記については、まず外国音をどの程度国語の音韻体系の中に認めるか(例「v」「ti」「di」…)ということと、どういうふうに呼称するか、あるいはどういう呼称をとるか(例ヴェニス——ベニス、ヴェネチア——ベネチア、インク——インキ)という二つの根本問題があり、これらが決定してはじめてどういかなで書き表わすかということが問題になるのである。国語審議会としては、今後これらの問題を順次取り上げて、審議していく予定であるが、さしあたって部分的に決定した事項をa, b, c に示したのである。

- a) 外来語をかな書きにする場合、「ファッション」「フィクション」「ニュー・フェース」「フォーム」などのごとく「ファ」「フィ」「フェ」「フォ」と書く必要のあるものもあるが、さ

しつかえないかぎり、「ファ」「フィ」「フェ」「フォ」の代りに、「ハ」「ヒ」「ヘ」「ホ」と書きたい。ことに「フォ」は「ホルマリン」「プラットホーム」「ユニホーム」「マイクロホン」などのごとく、多くの場合「ホ」と書いてさしつかえないようである。

同様に「ヴァ」「ヴィ」「ヴ」「ヴェ」「ヴォ」も、さしつかえないかぎり、「バ」「ビ」「ブ」「ベ」「ボ」と書くことにしたいが、これらも、「オーバー」「テレビジョン」「カーブ」「ベランダ」「ボルト」のごとく、多くの場合「バ」「ビ」「ブ」「ベ」「ボ」と書いてさしつかえないようである。

- b) 外来語をかな書きにする場合、「ティーパーティー」「ハンディキャップ」のごとく、「ティ」「ディ」と書く必要のあるものもあるが、さしつかえないかぎり、「ティ」「ディ」の代りに、「チ」「ジ」と書きたい。これらもまた、「チンキ」「チーム」「ラジオ」「ジレンマ」などのごとく、多くの場合、「チ」「ジ」と書いてさしつかえないようである。

なお「ヂ」は、外来語および外国の地名・人名のかな表記では、いっさい用いないことにしている。

- c) 「アジャ」「アジア」のごとく、原つづりにおける ia の a の表記には「ヤ」「ア」の両様が行われているが、これからは原則として「ア」と書くこととした。しかしながら 鉄道の「ダイヤ」のごときは、これを「ダイア」と書くことがないので、

これまでどおり「ヤ」と書いてさしつかえない。

2 英語語尾の長音符号について

英語などの語尾の er, or, ar をかな書きにする場合長音符号「ー」をつけることは、長年の慣習であるが、近ごろはこれを省こうとする主張もある。この長音符号をつけないことは、原音により近い表記であると思われるし、能率の点からいっても、一概に退けるべきものでないが、これは単に術語だけの問題でなく、すでに慣用の久しい外国の地名・人名や外来語などの発音表記に広範な変化をもたらすので、今にわかに賛意を表するわけにはいかない。原則としてはこれまでどおり長音符号をつけるのが適当であると考えるが、すでに「スリッパ」「ドア」「ハンマ」などのごとく長音符号をつけなくて行われているものや、これから造る術語では、しいてつけるに及ばないので、その含みをもたせてある。

なお、英語の語尾の gy, py やドイツ語の語尾の gie pie (そのほかにもある)も、er, or, ar の場合と同様に、長音符号「ー」をつけるものと考えて、「原語のつづりの終りの er, or, ar など」という表現をしておいた。(例エネルギー, エントロピー)

3 術語のかな書きと送りがなについて

- a) 国語の表記法として最も広く行われているのは、漢字かなまじり文であり、かなは普通にひらがなを用いている。かたかなは現在では主として外国の地名・人名や外来語や擬声語などを

書き表わす場合に限り用いられる。術語の表記についても、文部省著作の教科書ではおおむね以上の慣習に従っているが 特に術語であることを明らかにしたい場合には、かな書きの部分にかたかなを用いてさしつかえない。

- b) 送りがなについては、文部省著作の教科書では 比較的に多く送る方針を採り、公用文ではなるべく送らないことになっている。文部省刊行物の送りがなはこの両者の中間をいくものといえよう。このように送りがなが各方面でまちまちなのは決して望ましいことではないが、送りがなというものは書く場合と読む場合とでは立場が相反するものであるから、統一することがなかなか困難なのである。国語審議会としても今後の審議を予定しているが、さしあたって、術語の送りがなについては、難読・誤読を避けるに必要な程度のかなを送ることは妥当な処置であると考える。

「アジャ」か「アジア」か

【問】 今度、国語審議会では、「アジア」「イタリア」と書くことに決めたそうですが、「アジャ」「イタリヤ」と書くべきではないでしょうか。

【答】 Asia などの ia は外国語としては「ア」と発音されるのですが、わが国では生活語化するに従い「ヤ」と発音されがちであります。もっとも實際上、「アジア」という人もあり、「ア

ジャ」という人もありますが、書き表わす場合は、「ア」と書くことにしたのであります。

それはちょうど「ばあい」「よりあい」が人により「ばあい」または「ばやい」「よりあい」または「よりやい」と発音されますが、書く場合は「ばあい」「よりあい」と書くし、ふりがなも必ず「あい」を用いているので、それと同じ関係であります。ただし汽車の「ダイヤ」のように「ダイア」と発音されることの無い語は「ダイヤ」と書くことにしています。

9 中国地名・人名の書き 方の表について

【問】 中国の地名・人名はどうして中国音でかな書きにしなければいけないのですか。

【答】 これについては、中国地名・人名の書き方の表が発表されたときの新聞発表を以下に掲げます。

当用漢字の普及に伴って、固有名詞の書き表わし方が大きな問題となっています。このうちで、わが国の地名・人名はしばらくおくとして、外国の地名・人名においては、すでに当用漢字表のまえがきの「使用上の注意事項」の中にも、

(ロ) 外国（中華民国を除く）の地名・人名は、かな書きにする。としるしてあります。

国語審議会では、かねてから中国の地名・人名の取扱について考慮し、漢字主査委員会において、朝日・毎日・読売・共同・放送協会5社の案である「^{かな}中国^{地名}_{書き}^{人名}一覧」を検討し、その結果を第15回総会に中間報告したのであります。同総会においては、

(一) 中国の地名・人名はかな書きにする。

(二) そのかな書きは中国の現代標準音に基く、という基本方針を決定し、さらに、具体案を審議するために、新しく外国（中国）の地名・人名の書き方に関する主査委員会を設けることになりました。

た。この委員会で、数回にわたって慎重に審議した結果、「中国地名・人名の書き方の表」を総会に提出して、これが正式に議決され、この書き方の普及に関して最善の努力をしできるかぎりすみやかに実施することを希望条件として文部大臣に建議したのであります。

中国の地名・人名に用いられる漢字の中には、当用漢字にはずれるものが相当に多くありますから、かな書きにすることは、一応、適当なことでありますが、かな書きにする場合、わが国の字音によらず、中国音でしるすということは、文字の問題をふみこえてことばの面に関係する重大な問題であります。しかしながら、漢字制限の立場からだけではなく、国際上の大勢から考えても今後必ずしも漢字をなかだちとしないで中国の地名・人名がはいってくるのが考えられますから、この際、字音によって書くよりは、中国音に基いて書くことを選んだほうがいっそう適切であるということになります。今日まで長い間、蔣介石と漢字で書いて〔シヨ一カイセキ〕と呼んでいたものを、チャン・チェシーと中国音によってかな書きにすることは、現在、漢字を比較的にたくさん知っている人にとっては、かえって不便でもあり、また困難なことでもありましようが、国語の将来を考えますと、やはりかくあるべきだと信ずるのであります。一般社会の理解と協力を願う次第であります。

10 送りがなについて

【問】 現行の文部省著作教科書の送りがなのつけ方は、国語調査委員会の「送仮名法」以来、せっかく整ってきた送りがなを混乱させるものではないでしょうか。

【答】 現行の文部省著作の教科書では児童にとって誤読 難読のおそれをできるだけ少なくするという教育上の心配りから 送りがなは多くつけるたてまえになっています。そのため たとえば 動詞についていえば、自動・他動の対応のあるもの、他の動詞または品詞と関係のあるものはそれらと区別のつくようにその語としての活用語尾を送るだけでなく、多く送りがなをつけるのであります。（例、表わす、当たる、変わる、確かめる、など）

また形容詞では、誤読のおそれのあるものは、活用語尾の前の音節から送るものもあります（例、大きい、小さい、危うい、など）。複合動詞については上のにも、下のにも送り、またそれが名詞になっても送りがなを省かないのを原則とし（例、取り扱う、取り扱い、落ち着く、落ち着き、など）、送りがなを省いても読み誤りのおそれがなく、そのうえ送りがなを省く慣用が固定していると認められるものだけは省くことになっています（例、受持、取引、割合など）。

なお、総理庁・文部省編集の「公文用語の手びき」に送りがなのつけ方を示してありますが、これは国定教科書の送りがなとは多少違

っております。このほうでは、慣習や簡略な書き方をするたてまえから動詞は、当る、変るなどのように「た」「わ」を省きます。また、複合動詞が名詞になった場合には、誤読のおそれのないかぎり、送りがなの一部または全部を省くようになっていきます（例、打ち合わせー打合せ、取り計らうー取計い、申し込むー申込、など）。当用漢字が定められたのに伴い、漢字まじり文にできるだけ一定した書き方のできることが望ましいと考えています。それには送りがなのつけ方は重要な問題であります。理論的にも実際的にも国民全体にとって、よりよいきまりが早くできたらと考え努力中です。

【問】 検定本の小学校国語教科書を見ましたが、国語の表記、ことに送りがながまちまちなのは驚きました。

【答】 動詞の送りがなは、明治以来、その活用語尾をもとに整理してきたので、「おきる」は「起きる」、「おこる」は「起る」と書くことになっていました。なぜならば、

お[○]き[○]る カ行上一段活用

お[○]こ[○]る ラ行四段活用

の違いがあるからです。ところが、こういう活用語尾による書き分けは昔のように文章の書き手が少数の選ばれた人であったときはともかく、今日またはこれからのように、すべての国民がみな文章を書かなければならない時代になりますと、右のように語尾の活用の違いを考えて書き分けることがむずかしくなります。そして「おきる」も「おこる」も同じように感じて、

そこに共通する語根の「お——」だけを漢字にして、その下の「一きる」「一こる」はどちらも送りがないにする、いわば一般的な書き方が自然に生れてきました。それでよいのだという考え方と、いや「起きる」「起る」でよいという考え方と、二つの流れが対立しているのが現状です。

ところで、文部省著作の国語教科書では、たとえば、「向く」「向かう」というふうに一般的な書き方を原則として採っているのですが、例外的に「起る」「聞える」「落す」などの数語が残っています。これらの例外をなくしてしまうか、あるいは逆に、例外のような書き方を本則にしてしまうかということは、今後の問題として取り上げられることになっています。

【問】 文部省編「総合当用漢字表」に、教科書と公用文とで送りがないの使い方が違っている例があげてありますが、なぜ統一しないのですか。わたしたちのクラスの討論会で問題になりました。

【答】 送りがなは、明治以来たびたび一定しようと試みられましたが、今日まで、まだすべての文章に通じて用いる一定のものができていません。今あるのは、それぞれの職域で取り決めたものです。したがって、公用文と教科書とでだいたい同じであるが、いくらか違ったものがあるのです。

公用文の送りがなは、明治以来の伝統を引いているので、その字の読みを示す上に必要で、じゅうぶんな程度で、なるべく少なく送るというたてまえでできています。それでたとえば、

「あたる」「あてる」は「当る」「当てる」としているわけです。

すなわち、

あた 当	らない	当	てない
	り		て
	る		てる
	れば		てれば
	ろう		てよう

(ラ行五段活用)

(タ行下一段活用)

ところが、この「あたる」はラ行五段活用であるから「当る」でよい。「あてる」はタ行下一段活用であるから「当てる」と書く。というようなことは、動詞の活用語尾について学習したものでないとわからないことです。一般には、「あたる」も「あてる」も同じ活用系列の中に属しているというふうに考えがちです。そこで「あたる」も「あてる」も同じ「あ」の語幹であるように考えて、自然、「当たる」「当てる」と書く人が多くなりました。教科書では、その大勢によって、その送り方を採用したのですが、それでもまだその原則に徹底しないところがあります。たとえば、

聞く 落ちる 起きる

聞える 落す 起す

などです。それは まだそう書く人が世間に多いからです。

以上、送りがなには大きく二つの立て方があるということを

述べました。これで、お問合せに対する答は尽したと思います。さて、みなさんはどちらの立て方がよいと思いますか。

「当る」と「当てる」

【問】 教科書では「当たる」と書いて「^あ当」と読み、公用文では「当る」と書いて「^{あて}当」と読むのはどういうわけですか。

【答】 「当」の字は、元来「あたる」とも、「あてる」とも読める字（すなわちその意味がある字）です。それで、漢文では

一騎^{アケル}当^ニ千^レ

といいます。それを、日本語では適当にかなを送って読むのです。

漢文の知識の豊富であった明治時代には「当る」「当てる」と書き分けて、それでじゅうぶんに間に合っていたのですが、今日では漢文の知識が低下したので、それを問題にするようになり、従来のように

(当る
当てる

と書くか、または新しく

(当たる
当てる

と書くことにするか、どちらがよいかという問題になっている

わけです。

「次 の と お り」

【問】 「次」は「つぐ」という動詞であるから、やはり「次ぎの」と「ぎ」を送らなければならないのではないのでしょうか。

【答】 「次ぎ」としてもまちがいではありませんが、「次に、次の」などでは慣用がほとんど固定していますから、現在、文部省の表記の基準では「次」の字だけにしています。

【問】 「とおり」は「通り」でしょうか。

【答】 これは「とおり」とかなで書くことにしています。それは「通り道」の意味の「通り」とは違った意味になっているからです。

「あたる・代わる・暮らす・積もる」など

【問】 「当る」がよいか「当たる」がよいか。そのほか——

1 2 3

当る——当たる——当てる

代る——代わる——代える

暮す——暮らす

積る——積もる

【答】 社会では多く〔1〕の書き方を採っていますし、教科書では〔2〕の書き方を採っています。どちらもまちがいではあり

ません。そして、この問題はまだ国語審議会でも取り上げていません。

「明かるい」と「明るい」

【問】 「明かるい」と「明るい」と、どちらが正しいですか。(小学5年生)

【答】 明治時代の本にはすべて「明るい」とありましたので、今でもその書き方が社会に残っていますが、現在の教科書では「明かるい」と書いています。どちらも正しい書き方ですが、皆さんは、学校で習っているとおりに書いてください。そして、おとなの人が「明るい」と書いているのを見ても、それはまちがいでではなく、やはり「^あ明るい」と読むのだということを知っておいてください。

「言う」と「云う」

【問】 「ゆう」という字は、この「言う」という字と、この「云う」という字と、どちらが正しいですか。

【答】 どちらも正しいのですが、当用漢字表には「云」という字がありませんから、これからは「言う」とだけ書きます。そして、なるべく「いう」とかなで書くほうがよいと思います。新かなづかいでは、「ゆう」でなく、「いう」です。

11 左横書きについて

【問】 漢字制限・新かなづかいを実行したわれわれは、今一步進んで左縦書きを本体とし、左横書きを併用したらどうでしょうか。

【答】 昭和24年4月5日、内閣から政府部内一般に通達された「公用文の書き方」には「一定の猶予期間を定めてなるべく広い範囲にわたって左横書きとする」という一項が設けられています。これは従来の縦書きに比べて、横書きのほうが種々の点で実務上利点が多いと考えられた結果であります。

たとえば、書いた部分がすぐ見え、インキで手がよごれないとか、視野が広く、読みやすいとか、数式やローマ字をいれるのに便利だとか、欧文の書類といっしょにとじ入れるのにつづろがよいとか、右手でペンをもちながらページをめくるのに便利だとかいう点であります。

しかし、従来の伝統や習慣もあって、一挙にこれを改めるときにはかえって能率が一時低下することも考えられ、また縦書き用につくった資材にむだができることを恐れて「一定の猶予期間」を設けてこれを実行することになったのであります。文部省としてはこの通達の趣旨を尊重して、事務用書類には現在すでに左横書きを実行しています。ただ教科書には現在一般に行われている社会習慣を考慮して縦書きを用いているものもあ

りますが、一部のものには左横書きを用いています。左から書き始める縦書きは社会習慣として一般化されていないので、現在これについては考えてはいません。

【問】 文部省では横書きを奨励するつもりですか。

【答】 文部省では、昭和24年4月5日に内閣から通達された「公用文作成の基準について」の中の「書き方について」の第1項に基づいて、事務用書類の横書きを実行し、書式の統一が行われるよう努力しております。文部省としては、公用文の改善についての事務を主管している官庁ですから、当然政府の決定の線に沿って公用文の横書きを推進するよう努めております。ただし、一般民間の出版物や私的文書等については、別に考えていません。

【問】 横書きの長所についての所論は正しいでしょうか。

【答】 縦書きと横書きの長短については、内閣に設置された「公用文改善協議会」で相当の議論の末、書類は、なるべく広い範囲にわたって左横書きとするという決定に達したものです。そして、この協議会の報告が政府に採用され、各官庁に通達されたのです。

12 そ の 他

「ニホン」か「ニッポン」か

【問】 自分の国の呼称が「ニホン」「ニッポン」と両様あるのはおかしいと思います。国号の呼称は統一すべきではないでしょうか。

【答】 昭和2年の第52回帝国議会に国号「日本」の呼称統一に関する請願案が出て以来、しばしば議会でも問題になりましたが、昭和14年の第73回議会には議員提出の建議案となり、それに対して樵貝政府委員の答弁があり、いずれも公式の国家的決定はまだないということになっています。（当時の委員会議録または文部時報（昭和26年9月号・11月号 補注）所載の三宅武郎「国号『日本』の読み方について」を参照してください。）

文部省の教科書では明治以来、普通の文章には「にっぽん」とふりがなをつけ、唱歌などでは字あし（字数）の関係上、自由に「にほん」とも「にっぽん」とも使っています。そしてそのどちらをも正しい日本語とみて、そのうちの一つを誤りだと教えてきたことはありません。けっきょく問題は将来に残されているわけですが、たとえば、「山」の「さん」は音（漢語）で「やま」は訓（やまとことば）であるというのに準じて、「絵」

の「かい」は音で、「え」は訓、また「文字」の「もんじ」とか「日本」の「にっぽん」とかといえば音のことば（漢語）で、それを「もじ」とか「にほん」とかといえば訓読みのことばと考へて、そのどちらをも現代日本語の音訓二重制度の中での平等な存在として認めた上、さらに将来の日本語の動向をも見きわめた上で、慎重に考へるべきだと思います。

文語と口語との混用

【問】 現代文として文語体と口語体との混用はいけないと書いてある本がありますが、一流の翻訳家の訳本の中にしばしばこれを発見するのです。たとえば「知りそめし瞬間に愛したのです。あなたはいかに思はるるや」とか「わたしと別るるときあなたは泣いた。」また「いみじ」「えもいわず」などの古語を口語中に平気で使っています。

それから「……です」「……します」のような一応ていねいに聞えることばと「……だ」「……である」を混用している文もたいへん多いようです。御説明ください。

【答】 文語と口語との混用は原則として避けるのが当然でしょう。ただし、たとえば「堂々たる態度」の「堂々たる」は現代の口語文における一種の連体詞として、また「断固として」などは副詞として認められ、「認めるべきだ」の「べき」なども口語文としては認めることになっています。例示の「いかに思はるる

や」はもちろん「どう思われますか」が妥当な表現です。もっとも九州方言では今日でも「れる」を「るる」というふうに使っていますから、そうした方言の混在かとも考えられますが、それはそれとして、翻訳では現在の標準語法によるのが正しい態度でしょう。古風な言い方なるべく避けたほうが翻訳をよくする最善の道なのですが、こういうことは一に翻訳者の自覚を待つほかはありません。しかもその自覚を促すことは読者の責任です。「です調」「だ調」などは文体の基礎ですから、それは一編の文章中に一貫するのが原則ですが、その上でときに意識的に格を破るということもあり得ます。また翻訳には翻訳の下請けということがあり、その下請けは必ずしも1冊の本をひとりの手でまとめるというものではなく、数人の手で分担することもあります。それで編により章によって文体や用字法が違っていることもありましよう。

部 首 に つ い て

【問】 字典の部首の創作者と年代・歴史などを教えてください。

【答】 「字典の部首」ということを広い意味に解釈してそれに答えようとするとも長くなりますから、ここでは狭い意味に、康熙字典や、普通の漢和字典における画引き字書の部首（214部あるもの）ということに解釈して、その創作者と時代などについて簡単にお答えします。

それは、明の梅膺祚の「字彙」が元祖です。

この字彙の部の214部の分け方が、それまでにあった説文（正しくは説文解字）や玉編などの分け方に比べて非常に便利であったので、その後は明の張自烈の正字通や 清の康熙字典 民国の辞源などに至るまで、すべてこの分け方によっています。日本の漢和辞典の分け方もそうであることは、御承知のとおりであります。

「疎」のヘン

【問】 「疎」のヘンは何と呼びますか。

【答】 ヒキヘンと呼びます。それは「疋」の字をヘンにしたものだからです。ちょうど「路」のヘンをアシヘン（足ヘン）と呼ぶのと同じです。

MEJ 4055

国語問題問答

定価 円 22.00

昭和二十八年七月一日印刷
昭和二十八年七月二十日発行

著作権所有

文

部

省

発行所

東京都千代田区神田小川町一丁目一番地
光風出版株式会社

代表者 竹田 光二

印刷者

名古屋市昭和区白金町二丁目八番地
竹田印刷株式会社

代表者 福田 米吉

発行所

光風出版株式会社

東京営業所

東京都千代田区神田小川町一丁目一
番地 電話 三三七七〇番
振替口座東京 一六二五九九番

名古屋営業所

名古屋市昭和区白金町二丁目八番地
電話 二五八六番
振替口座名古屋 三八二五三番